
妖精郷幻想奇譚

クラウン・クラウン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖精郷幻想奇譚

【Nコード】

N9398Z

【作者名】

クラウン・クラウン

【あらすじ】

我々が現実と呼ぶ世界と対になる世界：アヴァロン。幻想と呼ばれる生き物が生息し、存在を否定された魔法が存在し、そして：取り換えっ子がいた。自分に取り付いた精霊・妖精と自分の身を交換する事で人外の力と能力を行使するチェンジリング：その中でも精霊と呼ばれる存在を宿す少女：不思議な夢の声に少年が導かれる時：世界の境界線は崩壊し、二人は邂逅する。

（以前投稿していたものですが、いろいろな事情で一度削除した物を加筆修正して投稿します。）

起

世界は二面性で出来ている。

プラスに対するマイナスのように…火に対する水ののように…男に対する女ののように…光に対する闇のように…二律背反にも似た対極の存在で成り立っている…では、この世界の対極は何処げんじつにあるのだろうか？…案外、その境界線は薄くもろいものかもしれない。

人の手の入っていない、原生の森に分け入ったことはあるだろうか？

樹木は日の光を求めて枝葉を伸ばし、地面を根で抉って凹凸を作り出す。その根元では多種多様な草が地面を覆い隠し、虫や獣の命あるものは常に弱肉強食という自然の掟の中で生きている。

人の安易な立ち入りを拒むそんな場所、無秩序と言う名の秩序の世界である。

何が言いたいのかと言えば……少なくとも、年頃の少女がたった一人で全力疾走するような場所ではないという事だ。

「くそ、抜かった。こんな場所で、しかもランドと離れてしまうなど、不覚…」

形のいい唇から、乱れた息とともに悔しげな言葉が吐き出される。凜とした響きの声に相応しく、可愛いと言うよりも凜々しいと評すべき容姿に、白磁のように白い肌を飾る水色の髪と澄んだ湖面のように深く蒼い瞳はたとえ森の中であっても映える。

同時に、見る目が有るものが見れば、彼女の知性を感じさせる深い蒼の瞳で周囲を警戒し、荒れた地面の上を疾走しているながら、平地と変わらないレベルで重心が驚くほどに安定している事を見て取るだろう…明らかに素人の動きでない。

それに加えて、彼女の右手に持っている剣：所謂ロングソードと呼ばれる剣を見れば、彼女が武人かそれに類する者、あるいはそういった訓練を受けた者であることを想像する事は容易いはずだ。

「それにしても…」

少女の顔に浮かんだ表情の名を不敵、あるいは苦笑と呼ぶ。

「今日は何か？人生で最も運気が停滞する日か何かか！？出かける時の水晶占いじゃそんなことなにも言っただぞ！？」

いきなり、少女がぶつちやけた。

誰に、あるいは何に対する愚痴かを知りようはないが、そもそもにして彼女の状況がただ事ではないのだ。

言わなきゃやってられない事もあるのだろう。口調に違和感がないところを見ると、これが彼女の地かもしれない。

「しかも、こんな時に狙ってこなくても良いではないか！何か？私が女らしい格好をしたことに文句でもあるのか！？普段着飾らなくても16の乙女だぞ！？」

少女はスカートの裾を持ち上げて走っている。淑女としてははしたない格好だが、彼女もやりたくてやっているわけではあるまい。

何故なら彼女の着ている物は：瞳の色と同じ蒼のドレス姿だ。山道を走るのに向いているかと問われればはつきり真逆だといえる恰好である。

スカートから手を放せば裾に足を取られ、顔面から転倒してしまう未来が容易くイメージ出来る。

ついでに、彼女の長い水色の髪は背後で一本の三つ編みにされて髪飾りが付けられ、唇には紅がさしてある。

汗で折角の化粧が半ば崩れてしまっているのが残念だが、それでも未開の森の中よりは社交界の場のほうが似合う装いだろう：事実、彼女は数時間前までそう言う煌びやかな場所にいたのだ。

それなのに、数時間後には森の中を全力疾走しているという状況に、蒼の瞳には薄く光る物が滲んでいる。

「ああ、もう！！重い！！大きい！！目立つ！！邪魔！！」

ドレスに恨み言を言われる罪はない、むしろ哀れな被害者である。着やすさや保温性、本来服に求められるはずの機能の全てを排し、着る者を飾り、美しく見せるために生み出された代物である。

本来、エスコート役の男性に手を引かれてゆつくり歩くか、あるいは優雅なダンスを踊る為のものであって、着た人間が森の中で障害物走をやらかすシチュエーションなど、最初から想定されていない。

「恨むぞクレアー!!」

ここにいない、おそらくは女性の名を叫びながらも走るのをやめず、むしろさらに足を速めた。

そんな間にも、裾のレースが枝に引っかかり、華美なドレスが裂け、健康的な少女の生足が覗き、ここに男がいればどきりとして見入ってしまうだろう光景である。

疾走と共に官能的な装いへと現在進行形で変化していくドレスは、制作者である職人が見れば、血の涙を流すかもしれない。

「いつそ切り捨てるか?…いやいや、乙女としてそれは…」

邪魔なスカートを思い切って切り裂いてしまえば走り易くなるのはわかっている。

分かっているがしかし、森の中とはいえ本人曰く乙女のプライドとして野外露出など…命と天秤にかけられるものではないのだから…。

「フフフ…そうだったら、最低でも“追っ手”の皆殺しの必要が出てくるなあ…主に妾の精神の平和と安定の為に…」

表情に少々、壮絶な物が混じり始めた。

かれこれ結構な時間走っているの、意識が軽くハイになっているのだろうか。

思考がうまく働かず、物騒な方向を向いているようだ。

そんな乙女として厳しい選択に迫られていた彼女の進行方向、脇の茂みがガサリと揺れた。

「追いついたぞー!!」

飛び出てきたのは男だ。

見るからにガラの悪い無精鬚の男…軽鎧を着ているが、一番目を引くのはその手に持った肉厚の鉞だろつ。

どう見ても山師や狩人のような堅気では無い。

「はっ相手が悪かったなお嬢ちゃん!!」

「……」

やはり、彼女を追いかけている連中の一人で間違いないようだ。

「この俺、俊足のゲン…」

「やかましいわ戯けが!!」

「ブー…!!」

調子に乗って名乗りを上げようとしたらしい男に、少女は足を止めるどころか更に加速して肉薄すると、やるせなさど苛立ちと理不尽に対する怒りなどをまとめて、八つ当たりで男に叩き込んだ。何故八つ当たりと断定できるのかと言えば、どう考えても剣で切るなり突くなりした方が簡単なはずなのに、わざわざ柄を握った拳を男の頬に叩き込んだ事で明らかである。

女にも拳を使いたい時と場所と状況があるのだろう。

ともあれ、問題は柄を握った拳だ。

握り込んだその分の攻撃力は当然上がっており、彼女の滾る諸々の負の感情が上乘せされたそれは、男の頬を螺旋状にえぐり、体をコマのように1回転させた上で地面にたたきつけるという結果を出した。

「にがすかー!!」

「ぬな!？」

男を殴り倒し、その勢いそのまま走り去ろうとした少女が足を止めた。

否、止めざるを得なかった。

地面に沈んだかと思われた男が、予想外のしぶとさでドレスの端を掴むことに成功したのだ。

同時にびりつと文字通り衣を裂く音が聞こえてきては止まらざる

を得ない。

ただでさえダメージが限界に来ているドレスだ。

このまま走り出せばその結果等分かり切っている。

さっきまで自分で切り裂こうかと迷ってはいたが、それ以上に自分で脱ぐのと他人に脱がされるのでは山より高く、谷より深い差が存在する。

年頃の乙女として、他人に自分の服を脱がされるなど、伴侶以上の相手限定のイベントだ。

「こ、こらー！明らかな三下やられキャラのくせに何を場違いな根性を出しておるか！？」

「や、やかましい！ここで抑え込めば特別手当…が！！」

「その根性をもっと別の方向に向けんかたわけ！！」

皆まで言わせず、少女の踏みつけが俊足の某の顔面に入った。

男の鼻からしたらだと鼻血が流れるが、それでもドレスの裾を放そうとしない辺りの執念は見上げた物だ。

その理由が金と言うのがアレだが、金の魔力と言うのは侮りがたいものがあるのも真理だ。

倒錯的な格好をした美少女の素足で蹴りまくられ、鼻血を流している男の姿と言うのは第三者から見ればとんでもない光景なのだが、幸いと言うか不幸と言うかこの場に二人以外に人はいなかった。

おかげで誰かに見られるという事もなかったが、その分止めに入る人間もいないので二人だけでは止められない止まらないという感じだ。

「はーなーさーんーかー！！！」

「だーれーがーはーなーすーかー！！…ってあ」

「ん？」

蹴られまくっていた男が、何かに気づいて呆けた顔になった。

それに気がついた少女もなんだろうと動きを止める。

ここでやっと、客観的に状況を見る余裕を取り戻したのだが、同時に男の視線が自分…から少しずれた下の方を見ている事に気がつ

いた。

そして少女の状態と言うのが男の顔めがけて足を振り下ろしている状態であり、それはつまりスカートの中身が下から見えるということであり……………少女の蒼い瞳が別種の冷たさを宿す。

「え、えつと…」

「シ・ネ」

ドンと振り下ろされた足の下で殺人的な音が立ち、男が地面とキスする形で動かなくなった。

細かく痙攣を始めているので死んではないらしいが…。

「…しぶといな、まだ息があるのか？」

「そのくらいにしていただけですか？」

「くっ」

このさいトドメまでさしておこうかと物騒な事を考えていた所に声 came。

「…時間を食い過ぎたか…」

気がつけば、周囲をぐるっと囲まれている。

足元で寝ている男とおなじような連中が、目算で数十人……………本当に心外ではあるが、男のボーナスが確定してしまったらしい…止めは成功だ。

「やはり…ドレスが…」

少女の本来の健脚なら、俊足の某すら振りきれて今頃身を隠していたかもしれないと思うとやるせない。

着ている物のハンデというのは予想外に大きかったようだ。

ここまで来ると、ドレスに文字通り足を引っ張る呪いでもかかっていないかと疑ってしまうが、まず間違いなく八つ当たりだと自分で分かっているので余計に鬱な気分になる。

「やっと追いつきました」

先ほどの声の主が、男達の輪から一步前に出てきた。

それを見て思考を切り替えたのが、彼女の表情から読み取れる。

男は間違いなくこの連中の代表だろう。

「アクア王国王女、リイン・アクア姫様とお見受けします」

「人違いだと言ったら信じるか？」

問いかけに対して少女：リインは不敵で返した。

姫と呼ばれた所からして王族なのだろうが、十数人の男たちに囲まれながら微塵も臆した所がない堂々とした姿は、確かに人の上に立つ者特有の空気を纏っている。

「御冗談を」。

形だけとは言え、王族に対する礼を取る男を見るリインは、特徴のない男という感想を抱いた。

髪は長くもなく短くもない中間のくすんだ青、顔立ちはのっぺりとした面長：これと言って目を引くものがなく、印象に残りにくいというのがむしろ特徴といえる。

こんな場所ではなく、街中ですれ違っていたら気にも留めないだろう没個性：唯一気になるのが笑っているかのように細い目：実際笑っているのかそれとも生来の目の形かは不明だが、そこに親愛を感じさせるものはない。

例えるならば、爬虫類的な温度を感じさせない瞳だ。

「名高き剣姫である貴女様を見間違えているとしたら、私はこの役立たずの目を抉り出すでしょう」

「フン、知っていて聞くな」

「これは失礼を」

頭を下げる男からは敬意の欠片も感じられなかった。

これまでの事を考えれば当然だろう。

敬意を抱いている相手を山狩りの如く追いまわしたりはすまい。

「そういえば近く【継承】を受けられるそうで、気が早いと思われるかもしれませんが謹んでお喜び申し上げます」

演劇じみた祝辞の言葉はむしろ挑発的で、実際にカチンとくる何かがあった。

勿論、それを表に出すのは自制する。

男の思い通りに反応してやるほうが癪だ。

「それで、お前達は何者だ？」

ラインの目から見て…彼らはおそらく盗賊ではない。

鎧や武器に統一性はないが、集団で獲物を追^{ライン}い詰める統率された集団行動は訓練されたものだ。

そうでなければ、いかにハンデがあつたとしてもラインが追い付かれる事はなかつただろう。

どこかの国の兵か…傭兵にしてもかなりの手練…そんな連中がたまたま略奪目当てで襲つてきたと考えるよりも、目的があつて自分を狙つてきたと考える方がすつきりする。

実際、襲われる心当たりは無きにしも非ずだ。

「…さて、こんな無作法者を送り込んできたのはどこの誰だ？【フレイム】か？まさか【ウィンド】や【アース】とは言つまいな？それとも…」

「依頼主の事は守秘義務ですので」

食えない男だ。

完全に感情を制御しているのか、表情が欠片も動かなかつた。

「……フン、狸め」

「とはいえ、大人しく付いてきてくだされば貴女の疑問にも答が出ると思いますが？」

「断る！！」

即断だつた。

ついていったら何をされるか知れたものではないのだから当然だが、そもそも彼女は国の象徴といつても良い存在であり、何処の誰とも知れぬ輩にかどわかされていい人間ではないと、自他共に思う程度には重要人物だ。

「はい、そう思っていました」

男はラインの答えを予想していたのか、落胆の様子もなく細い眼を更に糸の様に細くした。

今度は確実に笑っている。

「その意気やよし！」

対するリインは腰に吊るしていた鞘に剣を戻した。

一見して降参の意思表示だが、周囲を囲む襲撃者たちは気を抜かない…むしろ緊張を高めている。

彼等は知っているのだ…リインには剣よりも更に警戒すべき”存在”が”憑いている”ことを…その様子に、リインがニヤリといふべき笑みを浮かべた。

「来たれ、【水底の貴人】ウンディーネ!!!」

リインの言葉と同時に、薄く蒼い光を孕んだ力が風のように吹き荒れ、中心であるリインに向かって集まってくる。

「取替えっチェンジリング子!!!」

驚愕と畏怖、羨望と恐怖の籠ったそれは、誰の発した言葉だっただろうか？

「現れた!!!」

「あれがアクアの【精霊】か!?!」

竜巻の中心、そこに立つリインの背には今まで影も形もなかった物…細身の全身鎧に身を包み、中世の騎士のような姿のナニカが浮いていた。

蒼白い鱗を全体の基調に、流水の意匠が施され、女性のラインを持つ細身のシルエツト、兜の後ろから背後に二本の角が伸び、海中のように広がっている青の長髪が印象的だ。

何よりも目を引くのはその腕…騎士の右手は肘から先がリインの身長ほどもある突撃槍ランス、左手はちゃんと五指になっているが、その指先は爬虫類の牙のように尖っている。

その姿に…この世の物では無い神の造形に対して、周囲を囲む男達からは感嘆の溜息が洩れた。

「ウンディーネの雄姿をその眼に刻め!!!」

襲撃者たちに見ている前で、リインが両手を掲げると、それに同調するように、ウンディーネが動き、両手を掲げた姿でリインに重なるようにして消える。

次の瞬間、リインの両手が青白く輝いて消滅し、消失した腕の代

りに蒼い粒子が両手の在った場所に集まって形をとる。

新たに現れたのはラインの両手ではなく、肘から先がランスとなった右腕、鋭く伸びた爪を持つ左腕：それは正しく、先ほど目にした青の騎士、ウンディーネの両手だった。

「さすが名高き戦姫、そのお年で両手を丸ごと取り替えられるとは」「人の年齢を持ち出すとは何処までも無礼な奴だな？」

「お褒めしているつもりなのですが、理解していただけないとはい…」目の前で起こった事を見ても、男にはなんら動じる所がなかった。この結果を予想していて、そのうえで”どうにかする”自信があるからこそのこの余裕なのだろう。

「しかし、その槍：こんな障害物の多い場所では、姫の全力を出せまずでしょうか？」

男は両手を広げてわざとらしく周囲を見回す。

周囲は原生林、其処ら中に木が生い茂っている。

そもそも、ランスとはある程度開けた場所での使用を想定した重量級武器であり、屋内やこの場所のように障害物の多いところでの取り直しには不向きな武器である。

男の部下達が既に、無言で木の幹や枝を盾にするように移動しているのを見れば、最初から…ここに追い込んだ時から地の利を利用するこの状況を狙っていたのは明らかだ。

「何よりここには山の中、“水辺”には遠い場所を選ばせていただけきました。いかにウンディーネとはいえ、全力はだせませうまい？」

「…何かと思えば…」

しかし、ラインは笑った。

圧倒的に不利な状況のはずなのに、余裕の微笑を浮かべている。

それを男がいぶかしむより早く、ラインの立っていた地面が足の形に陥没し、彼女の姿がかき消える。

「な！？」

背後、斜め後ろでした破砕音に振り向けば、部下である男の胸を、ランスで盾にしていた木の幹ごと貫いているラインの姿があった。

ゴボリと部下の男の口から血の塊がこぼれる。

一瞬で絶命したのが誰の目にも明らかだ。

「…なめるな」

襲撃者たちは見る。

高速移動の反動で捲れたリインのドレスのスカートの下…彼女の足…そこにあつたのは少女のやわらかく柔軟な筋肉を秘めた脚ではない。

蒼白い脚甲に覆われた騎士の脚…ウンディーネの両足…リインは両手だけでなく、両足までまとめて取り替えていたのだ。

そしてやっと、彼女が何をしたかを理解する。

理解できた…と言っても、リインは特別な事を何もしなかったのだろう。

ただ跳ねるように動いて、右手の槍を突き出しただけ、その一連の動きがあまりにも早すぎて、視界から消えたように見えただけだ。ここまですれば、リインを侮っていた事を認めざるを得ない。

まさか両手だけでなく、両足まで取替えるとは…そんな領域までいける人間はそう多くないが、リインが間違いなくそのうちの一人だと言う事を認めざる得追えなかった。

「まさかこれほどは…」

襲撃者達も、リインにウンディーネが取り憑いていた事は事前情報で知っていたからこそ、その力が十全に発揮できない場所を態々狙って襲撃していたというのに…まさか、純粋な力だけで圧倒されるとは思ってもしなかったのだろう。

彼女の才能を過小評価していた代償に、味方の命一つ…これが高いと見るか、安いと見るかは難しいところだ。

「どうした？顔色が悪いぞ？」

「いえいえ、姫君のお心を乱すようなことではない瑣末事ですので」

「ほう、そうか…ならば…」

周囲から自分を狙っている連中を見回してリインは槍を構える。胸を張り、“挑戦者達”を睥睨する姿は強者の風格を持っていた。

「かかって来い!!」
応えて、襲撃者達がラインに殺到する。

起（後書き）

アヴァロン

精霊と妖精が人と共にある世界、通常世界の対として存在する為、魔法と呼ばれる技術も存在し、幻獣や伝説上の生き物など向うの世界で否定された存在の生き物も生息している。

精霊を国の象徴としたアース、ウインド、フレイム、アクアの4国が存在している。

承

声が聞こえる。

遠くから…近くから…知らない誰かの声なのに、どこかで聞いた覚えのある誰かの声が…あるいは目の前の闇のすべてから……声が聞こえる。

形にならない声が聞こえる。

声は届いているのに、意味のある言葉に聞こえない。
理解できない音としか受け取れない。

それでも分かる。

この声の主は呼んでいる。

狂おしいほどに…渴望しているとわかる。

声が…遠く小さくなって行く…思わず手を伸ばし、近くに行こうとした所で…黒一色の世界に光が生まれた。

「…変な夢を見たな」

光を抜けた先に見えたのは、見慣れた自分の部屋の天井…その日、
遠野八雲トオノヤクモの朝は奇妙な夢を見る事から始まった。

「…っと言っわけです」

「ほ〜う、つ〜ま〜り遠野君は今朝変な夢を見たせいで遅刻した〜と?」

「はい」

呆れる担任教師、竜造寺高麗りゅうぞうていこうら：通称と言うか愛称コマちゃん…の反応に気まずい笑いを浮かべながら、八雲は内心で拙ったな〜と考えていた。

何と言うか、悪夢を見た時のような気だるさに負けたのがまずいけなかったと思う。

時計を見れば何時もより三十分早い目覚めだった事に、油断したのが失敗だった。

二度寝して一日の始まりをやりなおそうとか、そんな事を考えた結果がこれだ。

十分のつもりが一時間も寝過してしまふとは…あわてて制服に着替え、学ラン片手に全力疾走したものの、その程度で肉体の限界や物理法則の壁を突破出来れば誰も苦勞などしない。

今の状況を言葉で言い表すならば、“遠野八雲 オン ステージ in 教室”と言った所か?

クラスメート達の笑いと期待に満ちた熱い視線が、太陽炉の如く八雲に一点集中している。

元々の凶太さに加えて開き直りのコンボを発動させている八雲でなければ、羞恥で溶けていたのではあるまいか?と言うレベルだ。

他人の不幸と言うのは見ている分には楽しい…それは真理だろう。しかし、自分が当事者になってしまつては話が違ふ…出来れば八雲もそつち側でこの状況を笑って見ていたかつたと思うのだが、完全に自業自得なので諦めるしかない。

「いいですか〜遠野君?」

「う…は、はい」

説教が始まつた瞬間、八雲は思わずうめいて後ずさつた。

担任教師かつ年長者（実年齢は確か24歳）に対する態度として、不敬や不遜と言われても言い訳が出来ないが、その理由は一目瞭然

……説教が始まった瞬間、「ここにちゅうもく」とばかりに目の前に差し出された…服の上からでもそれと分かる二つのメロンの物体に圧倒されたのだ。

「高校生なんですから〜もつと自覚を持ってくれないと〜、起きられなかつたなんて言い訳は社会では通用しないんですよ〜？」

「お、おっしやる通りです」

竜造寺高麗と言う人物は、年齢にしては童顔で身長も低く、制服を着ていれば同級生で通るんじゃないかと言うくらいに見た目が若い。

外国の血が混じっているらしい地毛のハニーブロンドをセミロングに伸ばし、サイズの大きな眼鏡をかけ、彼女特有の間延びした性格とそれに伴う口調が本人の印象を更に幼く錯覚させる。

「ちゃんと聞いてますか〜遠野くん」

「勿論です」

そんな若く見られがちな彼女だが、唯一実年齢相当を通り越して明らかに平均以上だろつな所…つと言うか部分が、今八雲の目の前に差し出されているスイカの親戚だ。

男である八雲には、詳しいカップ数など分からないが、それでもアンパランス^{アンパランス}パースミスし過ぎじゃないのかと疑うデカさは、圧巻を通り越して威圧感まで発散してやがると来た。

更に性質が悪い事に、本人は自分の容姿に威厳が足りない事を自覚しているため、せめて生徒に説教する時くらいは大きく見せようという孔雀かハリセンボン理論で胸を張るので、自然とブツを見せつけて挑発するような格好になってしまう。

更に更に、物が物だけにやはり重いのか、胸の下で手を組んで支えているため、強調率が上がっている。

更に更に更に…実はコレ、孔明の畏的な物だったりもするのだ。

「お話はちゃ〜んと聞きましょう〜う！」

「ぬが!？」

ずんと言つ感じに、八雲の頭上に何かが落ちてきた。

頭頂部から入り、体の中心を突き抜けて波紋のように全身に広がる衝撃に、八雲の口から悲鳴が漏れる。

生理現象で漏れた涙でゆがむ視界の中、コマの右手を手刀の形に構えているのが見える。コマの畏が発動したのだろう。

畏と言っても要するに、コマの胸に気を取られていると話をちゃんと聞いていないと判断されて手刀が降ってくると言っただそれだけのことだが、回避するのがなかなか難しいと来ている。

そんな死屍累々な先人に習うように、八雲が引っ掛かったのを見てクラスメート達から歓声が上がっている。なんて友達がいのない連中だろうか？

「も〜う、なんで皆真面目にお話を聞かないんですか〜？」

知らぬは本人ばかりなり、なので全員でお前のせいだと突っ込みを入れた。

口に出した瞬間、次の標的にロックオンされてしまう為、心の内だけに秘めて言葉にはしないが。

「はいは〜い、授業に戻りますよ〜？」

スイッチの切り替えのように、全員が授業中モードに復帰する。

パプロフの犬も真っ青の揃いようだ。

「遠野君も早く席についてくださ〜い」

「うっ、はい」

基本的にコマはその場で怒るタイプなので、罰課題とかは出さなからなんとかその場をしのげばOKであるが。チョップのダメージがなかなか抜けない。

コマは今時珍しい体罰に躊躇しない教師である。

最も、それが問題になった事はない。

体罰と言ってもやってる事は一見してふざけた軽いお仕置きの手ヨップだけなので問題になった事は一度も無い。のだが、問題はあのチョップだ。

体罰もどきの軽いお仕置きに見えるあれは、正しく見た目だけであり、その威力は本物である。

一体どういう力の加え方をすれば再現できるのか知れないが、コマのそれは体の外ではなく、中にダメージが直接入ってくるのでこらえが効かないのだ。

本人も体罰という意識があるのかわからないか：ないからこそ遠慮なく叩き込んできている気がしないわけでもないが、それを確かめる勇氣はない。

知り合いが言うには、「それはひょっとして浸透系ジャナイカ？」とのことだったが、それを確かめる勇氣もまたなかつた。

ただでさえコマの授業はあのチョップのおかげで恐怖政治じみた所があるというのに、それに加えて実は拳法の達人だったなどと言うフラグが立つては、居眠りですら命がけになる。

生徒の中にはあのブツを間近で見ると、コンボを食らう前提と覚悟でわざとお茶目をやらかす剛の者までいたりする：同志を見る視線をよこしつつ、こつそり親指を立てて見せて来ている連中がそれだ。

八雲も応じて拳の親指を立てると半回転ジヨクニオチロさせた。

「よう、八雲」

自分の席に着いた八雲に声をかけたのは、前の席から体をひねって後ろを振り向いているツンツン髪ツンツンの立った釣り目気味のちよい悪風クラスメート、獅子王夜鳥ししやうやぶだ。

「お仲間に対してちよつと冷たいんでね？」

「いや、夜鳥お前：その所はきつちり否定して置くぞ」

確かに八雲も男だ。

異性に興味がないとか、実は男の方がいいとは言わないが、だからと言ってそこまでがつついた欲望丸出しな人間でもない。

無論、Mっ気全開な気質の持ち合わせもないし、そういう人間に見られるのも御免こうむる。

「あれはいくらなんでも反則だろうが、あんな風にあるだけで自己主張しているような代物を完全無視するのは相当な精神力が必要だぞ、女子でも時々引つかかるやつがいるってのに」

「それならなんで言い訳しなかったんだ？八雲って嘘が嫌いとかそういうキャラだったっけ？」

確かに、遅刻の言い訳はいくらでもあったが…。

「嘘には使用制限があるんだよ」

それがどんなつまらないことであっても、重要な事であっても嘘は嘘だ。

そしてつまらない嘘ほど簡単にはれる。

嘘とはその大小に関わらず、つけばつくほどに代償として信頼が消費されてゆく代物だ。

「狼少年？」

「イエス、嘘はここぞと言う時に、本当に隠したい事にだけ使うもんだ…と思っている」

「真理だね」

「ん…まだ何か騒がしいですね…今度は獅子王君ですか？」

竜造寺が二人の会話に気がついていたらしい。

その眼は既に夜鳥をロックオンしている。

全員が新たななる犠牲者に出現に第二ラウンド開始かとざわつくが…。

「いや…先生の授業って分かりやすいよな…と言う話をしていたところです」

別の意味で教室の空気がザワリと動いた。

「あ、あら…？」

「竜造寺先生、授業を進めてもらえませんか？俺、毎日先生の授業をととても楽しみにしてるんです！！」

「そ、そこまで言われては先生も頑張らないとダメですね…でもあんまり私語をしちゃダメですよ」

「はい…いけませんでした」

実にあっさり、夜鳥は回避不能のはずのトラップを回避した。

しかもコマを上機嫌にして…教室にいるコマ以外の全員が、その手際に唾然としている空気が伝わってくる。

「ふつ、ちよろいよコマちゃん」

「夜鳥：俺、お前は一回刺された方がいいと思う」

成績はなかなか、話術も上手く、顔もそこそこで見ての通り機転も利くクラスのお調子者ハイドレーカー的な男だが、割と長く付き合っている八雲にはこの男がその才能を真つ当な方向に使う将来と言うのがイメージ出来ない。

逆に、詐欺師になった夜鳥のイメージは実にあっさり浮かんでくるのだ：しかも結婚詐欺師的な何かに：獅子王夜鳥とは、つまるところそういう男なのだが：不思議と八雲とはウマが合うのは何故だろうと八雲本人も思う。

閑話休題こもあれ、これ以上やり過ぎると授業妨害になるので夜鳥も黙り、授業が本格的に再開されると授業中特有の静寂が戻ってきた。

「ここで重要なのは」
教科書を読みあげるコマの声と板書するチヨークの音、後はノートを取る生徒達が立てる小さな音だけが驚くほど大きく聞こえる。間延びした声が朝から眠気を誘うが、その辺りは皆、根性で我慢しているようだ。

「：変な夢だったな」
落ち着いた八雲は、少しだけ今朝の夢の事を思い出していた。内容はどうしようもなくシンプルでわけが分からない：なのに何故か妙に心に引っかかる夢だった：肝心の何が引っ掛かっているのかは八雲自身にも分からないのだが：。

「：ま、いいか」
少しだけ考えてから、八雲は考えるのをやめた。
もともとあまり物を深く考える方ではないし、所詮は夢だ。

精神科医の先生でもいれば、一般人が知らないような専門用語付きで解説してくれるかもしれないが、そこまでする必要も感じない。

「それよりも今は目の前の事だよ…」

「は～い、みなさん。ここもテストに出しますよ」

黒板を見れば、褒められてテンションが上がりがりまくっているコマが、ここぞとばかりにテストの要点を列挙しまくっている。

これを逃したらテストの点数と内心書のダブルで響くだろう。思わず嫌な汗を感じる大盤振る舞いだ。

「最終的に勝つのはウサギじゃなくて亀なんだよな…」
とりあえず亀になるため、授業に集中しようとして…。

「…え？」

集中できなかった。

驚きで思わず、八雲の腰が椅子から浮く。

静かな教室にはそんな声と音でも思ったより大きく響き、再び注目が集まってくる。

「どうしました遠野君？もう一回いつときですか？」

「い、いいえ結構です！！行っとくと言うか逝っちゃいますから！！」

主語がないから言い回しが微妙にエロい。

八雲自身慌てている為にわけのわからない事を口走っている。

それでも、混乱する頭で必死に考えてとっさに必要な時にしか使わない事になっているはずの“嘘”について誤魔化した。

「ふ〜ん、そうですか？」

「は、はい。何でもありません」

どこからどうみても、明らかに挙動不審な八雲だが、とりあえず騒いで授業妨害する気はないらしいと判断したコマは黒板に向き直り、板書の残りを書き込んでゆく。いささかあっさりしている気もするが、今はそれに構っている余裕が八雲にはない。

「な、何だ？」

八雲は自分の心臓が驚くほどの速さで鼓動を拍っているのを自覚した。

確かに今…八雲は誰かの声が聞いた。

聞き間違いでなければ、夢の中で聞いたあの声だ。

「皆…聞こえなかったのか？」

周りを見回すが、他のクラスメート達は声に反応した様子はない。彼等が反応したのは八雲の挙動不審に対して…聞こえていなかったのだらうか？

「…マジで？」

もし、さっきの音が、八雲にしか聞こえなかったとすれば、民主主義の法則にのっとって、間違っているのは少数派の八雲という事になる。

「空耳…だよな？」

できればそうであってほしい。

妙な夢を見るまでならともかく、聞こえないはずの声を聞いてしまつと言つのは冷静に考えて色々やばいと思う。

冗談でも何でもなく、精神科の先生の御厄介になる話だ。

「え？」

また…声が聞こえた。

しかも自分の後ろから…八雲の座っている席は、列の一番後ろ…その後ろには誰もいないはずだ。

有り得ないはずだ。

しかし、そんな理屈を考えるより早く、八雲の体は動いていた。とっさに背後を振り返つた…振り返ってしまった瞬間、八雲の平穩は終わりを告げた。

「……というわけでこうなるのです。分かりましたか？」

いつの間にか…生徒の数が一人減ってしまった事にだれも気付かないままに、淡々と授業は進んでゆく、彼等がその異常に気がつくのは少し先の未来の話…古来より、そこにいたはずの誰かがいつ

の間にか消えてしまう現象を指して、“神隠し”と言つ言葉が存在している。

「ぐおー!!」

森のなかと言う戦場での戦いは続いていた。

焦げ茶色の髪と目をした男が枝をへし折りながらはじき飛ばされてきて地面をバウンドする。

「悠長に寝ている暇など与えん!!」

「く、くそ!!」

怒声と共に立ち上がった男が、構えた所に追撃が来た。

ほぼ一足飛びの勢いで男に飛びかかつて行く姿と速度は人の物では無い。

異形の四肢とその身を取り換えたリインだ。

「ち、ちくしょー!!」

自分にとびかかってくるリインに対し、男が先に動いた。

不可視の力が男から放たれ、目の前の地面へと注ぎ込まれる。

その結果は、地面が盛り上がり、現れたのは厚みのある石壁として現われた。

「フン、魔法使いが混じっているのか？中々良い駒をそろえているようだが…」

正面から激突するルートにありながら、リインは避けるそぶりすらない。

むしる地面を砕く勢いで一步を踏みこみ、加速する。

「げふ!!」

右手のランスで文字通り壁となった石を砕き、その先の男の胸を鏡ごと貫いて心臓を破壊、即死させる。

「甘い!!」

息をつく暇もなく左手で背後を裏拳で薙ぐと、死角から放たれた

投げナイフが二本、弾かれて宙を舞う。

休む暇など与えないとばかりに来た拳大の火球と風の刃に対しては最初に刺し殺した男の死体を、槍に指したまま盾として使って防ぐ。

既に文字通りの死体からは悲鳴すら上がらないが、切られた傷からまだ温度を持ったままの血がしぶき、炎にあぶられたタンパク質が焼ける嫌な匂いが発される。

「この程度で妾を暗殺する心算だったとは、馬鹿にしているぞ!？」
リンは気にはしない。

少なくとも、この場においては自分の命より重要な事では無いと割り切る。

ランスを振り払って、無残な事になった死体を固まっている集団に投げ込み、囲みが乱れた所を一足飛びに距離を詰めて加撃する。

一連の動作はどれも無駄がなく、計算された戦術眼の元に立てられた…まるで舞のようだ。

その優雅さとは真逆に、彼女が左右の腕を振るうたび、その足でけりを放つたびに、確実に襲撃者は数を減らしてゆく…一人の少女が大人の男、しかも完全武装した十数人を相手取って優勢に立っている姿は御伽話じみているが、男達にとっては残念な事に…その眼に映る全てが現実だ。

「死にたくなければ背を向けよ！生憎と逃げる者を追うほどの余裕はない!！」

半数に減ったとは言え、いまだ10数人は残っている。

それを前にして慈悲をかけることが出来るのは、ひとえに彼女の持つ力が襲撃者達を圧倒するに足るものであるからこそだ。

「ふむ、これはまずいですね…さすがと言うべきなのでしょうが、人間心理を知っていらっしやる」

戦況を見ていたリーダーの男が呟き、同時に理解もしていた。

これは戦術だと…取り換えを行ったチェンジリングは確かに強力だが、それでも付け入る隙がないわけではない…“絶対の存在ではな

い”のだ。

そもそも、無敵の武力をもっていれば、最初の時点で逃げる必要もなかったはずであり、そして男はチェンジリングの“弱点”を知っている。

数をそろえたのはそのためだ。

大分数を減らされたとはいえ、残った人数で一度に攻撃をかければその弱点を突く事も不可能ではない。

ただしその為には、自分の命を顧みない覚悟が必要になるだろう。

この場合半数以上…三分の二は打ち取られるのを覚悟しなければならぬのだが、リインもそれに気が付いているが故に、連中に逃げ道を与える事で窮鼠にしないようにしているのだ。

案の定、生き残れるかもしれないという可能性に、襲撃者達は動揺していた。

死にたくないというのは人間と言うより、おおよそ全ての生き物の本能であり、誰だって死ぬ側より生き残る側に入りたいものだ。

そういった迷いは、生死の狭間で決定的に作用する。

「ど、どうすんだよ？こんなに強えなんて聞いてないぞ？」

リーダーの一番近くにいた男が伺いを立ててきた。

そんな問いが出る時点でリインの策略に囚われている証拠…問われた男が深い吐息を吐いて前に出る。

「止むを得ませんね、使う気はなかったんですが…これも私の見通しの甘さと受け入れましょう」

肩をすくめ、男は力を抜いて自然体になる。

「【長腕のネリー】」

リインの時と同じ、力の流れが男を中心に発生した。

それに気づかない者がいる訳がなく、全員の視線が集まる場所で現れたのは群青色の異形の騎士、全身を覆う鱗状の装甲に、蛇を思わせる兜、そして何より目を引くのはその両腕だ。

人体のパスを間違えたのではないかと思うほどに長く、手甲にはこれまた蛇の意匠、蛇の牙を思わせる鋭い五指の先端が足の甲の

直ぐ隣にある。

長腕のネリーと呼ばれた“妖精”が男の体の中に消え、起こる変化は男の両手だ。まともな人間の両手が歪な物と取り替えられる。

「ほう、お前もチェンジリングだったとはな、長腕のネリーか…」

「姫のような才能がなく、お恥ずかしい限りです」
才能がないというのは本当なのだろう。

取り換えられた両腕の内、右手は完全に取り替えられているが、左手は二の腕の半分くらいまでしか取り替えられておらず、後は生身のままで。

チェンジリングの取り換えには才能や努力による個人差があり、それは取り換える事の出来る体の面積に如実に現れる。

力をセーブしてどうにかなる相手などとなめているわけでもあるまい。

左右で腕の長さが違ってしている姿が、そのままこの男の同調率の限界と考えて間違いないだろう。

「今更ですが、キュールと申します」

「キュール？それは本名か？」

「もちろん偽名です。ちなみに昨日の寝酒から取りました」

「何所までも人を食った性質の悪い道化だな？」

「では、一手お手合わせ願います」

言うや否や、キュールが貫き手に構えた右手を突き出す。

彼我の距離は20メートルほど、とてもじゃないが攻撃の届く距離ではない…筈だったが…。

「くっ！！」

咄嗟に、リインは右手のランスを構えた。甲高い音が響き、振動が右手を通じて全身に流れてくる。

ランスと金属音を出して弾かれた”それ”は射線をずらされ、背後にあった木の幹を削り取った。

「ちっ追撃か!？」

リインが飛びのいた地面に次弾が突き刺さる。

「さすが戦姫、勘がいい」

「心にもないことを口にするな!!」

弾いた初撃、そして今地面に突き刺さっている物は飛び道具の類ではなかった。

その正体は…腕だ。

キュールの腕が、彼我の距離をゼロにするほどに伸びている。

元から長腕のネリーの腕は長かったが、20メートルもの長さではなかったはず…つまり、これは錯覚でもなんでもなく、単純に物理的な腕の長さが伸びたのだ。

「それが長腕のネリーの能力か!？」

長腕のネリー…湖や川など水辺に潜み、その腕を伸ばして子供を水の中に引きずり込むとされている妖精だ。

しかも、どうやらあの腕には関節が存在しないらしく、意匠にある蛇のように、両手がリインを威嚇するかのごとく動いている。

「こんな物ではありませんよ?」

饒舌に、そして得意げに語りながら、キュールは更に腕を振るう。今度は突き出す動きではなく、振り回す動きだ。

「厄介な!!己の妖精の能力を知り尽くしているのか!？」

振るわれる長腕のネリーの腕は鞭のようにしなりながら襲い掛かって来た。

爪が空気を打つ音がする。

達人の振るう鞭の先端は音速を越えるといわれているが、それと同じことが起こっているらしい。

あの先端に打たれば、それだけで皮膚が裂け、骨が碎かれるだろう。

「くっ!!」

当然、そんな物を食らうのはごめんなリインは襲い掛かってくる蛇の鞭を避け、それが出来ない物に関してはランスで打ち払う。

リインの間合いは完全に長腕のネリーの攻撃範囲に食われていた。この距離はウンディーネのそれではない…せめて近くに“川でも

あれば出来る事はある”のだが、キュールも言っていたように近くに水はない。

「それを狙ってこの場に誘導してきたのだから当然か…この上は…」
方法はある。

本人曰く、才能の足りないキュールは両手を取り替えるのが精一杯で、接近戦に持ち込めればラインの基本性能で圧倒できるだろう…現に、両足まで取り替えているラインには出来る、脚力に物を言わせた高速移動はキュールには出来ていない。

多少の傷を負う事を覚悟の上で、距離を詰めて一撃で決めれば勝機はある。

「…気配が変わりましたね？」

ラインの覚悟を、キュールは見抜いていた。

元より、彼女が出来る事は特攻か逃げの一手だ。

向かってきてくれるならともかく、逃げに回られると面倒な事になると考えていたので、ラインの選択はむしろ望む所だった。

「とはいえ…どうした物ですかね？」

キュールは、ウンディーネの突破力を舐めていない、むしろ最も警戒している。

そして接近戦になったら分が悪い事も理解している。

能力的に、長腕のネリーは近距離よりも中・長距離においてその真価を発揮する。つまり、ラインが目の前に来る前にどうにかしなくてはならないのだが…。

「…フム」

周囲を見回していたキュールは、周りを囲んでいた男達が距離を取ろうとしている事に気がついた。

それも当然だろう。

妖精や精霊の持つ力同士が真正面からぶつかれば、巻き込まれただ

けでただの人間では死にかなない。

キュールに後を任せて離れようとするのは当然の思考だ。

「フム、この手で行きましようか…」

何かを思いついたキュールは伸ばしていた左手を戻し、比較的近くにいた一人の首根っこを掴んで引き寄せる。

「う、あー!」

いきなり引つ張り戻された男は目を白黒させているが、キュールはそんな事を気にしない。

元から細かった目をさらに細くして男の顔を覗き込む。

「何処に行くつもりです?」

「え、ええ?」

捕らわれた男が首をかしげる。

何故そんな事を聞かれなければならないのかと言う風だ。

「給料分の働きはしてくださいよ」

「そ、そんな事言われても…お、俺達はチェンジリングじゃねーんですよ?これ以上出来ることはありませんや!」

「ありますよ」

「え?な!??」

そこからは問答無用だった。

キュールはチェンジリングの膂力に物を言わせて、男を投げ飛ばしたのだ。

特攻の姿勢で硬直したラインがいる場所目がけて…。

「ちょ、お主何を!??」

ラインは完全に出鼻をくじかれた。

キュールは自分の部下を、ラインに投げつけて来たのだ。

いきなりの凶行と、飛んでくる鎧付きの男、特攻のタイミングを潰された驚きで、咄嗟に避けるか打ち払うかでラインの思考が止ま

った。

「ゲブー!!」

「な!?!」

男の体を鎧ごと突き抜け、鋭い先端を持つ何か飛び出してきた。男の体から飛び出してきたそれは、一直線にラインの心臓を目標に突き進んでくる。男の体を目隠しに放たれたため、回避するためのタイミングは既に失っている。

「こ、つの!!」

それでも生存本能がラインの体を動かし、身を仰け反らせ、ウンディーネの四肢を使って命を繋ごうと動いた。

「ぐー!!」

命が助かったという意味では幸運だっただろう。

脇腹の一部を抉るように持つていかれたのは不幸だっただろう。

独楽のように回るラインの体から、返り血でないライン本人の血が円を描くように撒き散らされ、小柄な少女の体がドサリと重い音とともに地面に叩きつけられた。

「う…ぐ…何が!!」

意地で悲鳴を飲み込み、片膝をついて立ち上がるが、抉られた脇腹からはかなりの勢いで血が流れ、急速に目の前の地面に赤い血が染みこんで行く。

「おや、仕留めそこないましたか?」

長く伸ばした左腕を戻しながら、相変わらず細い目でキュールが笑う。

人間一人の体を貫いて襲ってきたのは、やはり長腕のネリーの腕だった。

「しかし、おかげで取替えは解けてしまったようですね?」

ラインは歯を食いしばる。

その四肢はウンディーネの物ではなく、彼女本来の彼女の物だ。脇腹に受けた傷は、常人なら十分に致命傷である。

それでも生きているのはラインに宿っているウンディーネが、持て

る力で宿主の命を繋いでいるからに他ならない。

そのため、今のウンディーネにはチェンジリングに割ける力がなく、取り換えが解けてしまったのだ。

「おや、何ですかその眼は？卑怯と罵りますか、望む所ですよ？」

「そういう…問題では…ない！！」

戦場において、不意打ちが汚いなどという気はリインにはない。

自分が死なないために、勝つ為に成しうる全てを持ってあたる姿勢は戦士としてはむしろ正しい。

生き残ったものにしか正義を語る事は出来なく、生き残れなければ悪と呼ばれても文句は言えない…結局殺し合いというものは最終的にはそこに至る。

故に、戦場に出た以上、不意打ちに倒れたとしてもそれは己の未熟さゆえだとリインは覚悟をしていたが…目の前の男は違う。

こいつは決して許されない事をした。

「貴様…部下を…」

目の前にいる外道は…自分の味方のはずの人間を一人犠牲にした…リインの不意を突く為だけにだ。

彼等の関係がどんな物だったかはこの際関係ない。

たとえ上下の関係があったとしても、笑顔で仲間を手にかける行為には嫌悪しか感じない。

「ええ、これ以上の被害を出さないために、尊い犠牲になってもらいました」

キュールの言葉に、他の襲撃者連中が揃って青くなる。

犠牲になった男は、たまたま近くにいただけだ。

それ以上の意味も以下の理由もない…つまり、リインの目をくらます事ができれば死ぬのは誰でも良かった…そう言う事だ。

「この下種が…邪妖精が好むわけだ…」

「一国の姫ともあろう方が、そんな差別的な物言いを…はしたなくはありませんか？」

妖精は人間を選んで憑くと言われている。

その人間の性格とフィーリングがあつたのだとか、容姿が気に入つたのだとか言われるが、幾つかの例外を除いてその理由と法則性を証明したものはいない。

そして、憑いた妖精を見てマスターである人間の性格や行動を悪し様に罵るのは忌避される行為だ。

「貴様に関しては問題あるまい！？ 真実なのだからな！！」

怒りの視線で睨みつけてくるリインに、キュールがゆっくりと近づいている。

いきなり彼女の身柄を確保しようとしなのは、最後の力での反撃を計算しているのだろう。

現に、腰のロングソードを再び抜いてキュールを睨んでいる今のリインの状態は、まさしく窮鼠と呼ぶにふさわしい。

「出来ればここで観念していただけると…」

「するわけがあるまい！！」

細い目の先で、サディスティックな笑みを浮かべるキュールに、リインは嫌悪しか感じなかった。

リインは意地でその薄ら笑いを止めてやると立ち上がるうとして…。

「あ…」

しかしそれは出来ず、それどころか膝から力が抜けて腰砕けになる。

視界がゆがみ、頭痛がするこれは…。

「毒か！？」

迂闊だったと言うしかない…長腕のネリーの意匠を見た時点で、その可能性に思い至るべきだったと齒？みする。

「仕方がありません、多少”軽く”なってもらうしかありませんね…」

長腕のネリーの腕が再び伸びる。狙いは膝をついているリインの足…人体を貫通する威力を考えれば、足が骨ごと断たれて千切れ飛ぶイメージが簡単に出来上がる。

キュールの言葉が正しければ、殺す気はないらしいが、激痛は常

人と同じく感じるし、足が断ち切られるのを見て正気でいられる自信はない…こいつらにとっては死んでいなければ何でもいいのだからが…。

「…何っ？」

「え？」

痛みが来るより先に聞こえた声と何かを殴打する音に、思わずリンは目を開けた。

そこにキュールの姿はない。

あるのは自分に背を向ける黒い…“誰か”の背中だった。

承（後書き）

精霊・妖精

精霊と要請は基本的に同じものである。

ただし、ウンディーネを含めた四精霊は妖精にはないいくつかの能力を保持している。

そのため国の象徴となっている。

精霊・妖精はその属性で四種類に分類され、それぞれの属性ごとの特徴を持ち、各々の属性に応じた生物の意匠を持っている。

精霊・妖精はそれぞれの能力と同時に、その生物の能力も同時に使用できる。

声に振り返ったら…コスプレした殺人鬼がいた。

初対面の相手を見て、いきなり殺人鬼と思うのは最低最悪の第一印象だと思うが、なにやら鎧のようなものを着て、物騒な刃物付きの手甲をつけている人間をストリートに表現したら…やっぱりコスプレした殺人鬼と言う言葉しか出てこないだろう。

ご丁寧にも、手甲の鋭い爪にはまだ乾いていない血みtainな赤い物がついていると来ている。

何でこんなあやしいを通り越して危ない格好の奴が、教室に侵入してきたのに誰も気がつかなかったのだろうか…コマ先生を初め何で皆騒がないだろうかとかいろいろあるがしかし、八雲にはそこまで冷静に相手を観察するだけの余裕はなかった。

理由は単純に、男がその物騒な凶器をまさに振り下ろそうとしていたからだ。

その瞬間の八雲の思考は、“死”と言うとてもシンプルな一文字に埋め尽くされていたため…。

「何つつが!？」

「…あれ？」

八雲は、自分の拳に感じた衝撃に驚きの声を漏らした。

見れば、腕を振り下ろそうとしている殺人鬼さんに、カウンターを叩き込んでいる自分がある…感触からして、男の鼻骨はへし折れているだろう。

「おや〜?」

「ぐあ!!」

しかも連続で反対の手に衝撃が来た。

男がひるんだ所に、ワン・ツーでさらに一発入れたらしい…自分で殴ったはずなのに“らしい”と言うのは、やはり八雲が殴ろうと考へて行った行動ではないからだ…多分ではあるが、生存本能とか

そう言う類の物が、思考より早く、反射的に体を動かしているのだらう。

誰だって死にたくない。

それは人間に限らず生物なら当然持っているはずの本能：要するに、殺されるかもしれないという恐怖と死と言う未来予想図に直面した事で、生存本能が過剰に反応し、八雲の意思を無視して自分を殺すかもしれない男：目の前で盛大に鼻血を垂れ流している男に力ウンターを叩き込んだのだらう。

八雲自身、自殺志願者と言うわけでもないし、事情すら良く分からないが、その反応はこの場では多分正しい：気がする。

「ち、調子に…がつ!!」

何やら男が反撃に出ようと言う雰囲気だったので、最後だけは八雲自身の意志で先手を取ると顎を横から水平に打ち抜いた。

脳を揺らされた男が膝をつくことで、やっと少し冷静さが戻って来る。

「えっと…」

しかし、周囲を見回した瞬間に、八雲の思考は再びフリーズした。見慣れた教室は何処にも無く、代わりにあるのは目に優しい緑黄色の森林と、むせるような植物の匂い：withコスプレして剣を構えているむさ苦しい男達と来た：思考の一つや二つ、簡単に止まるレベルのギャップだ。

「お、お主一体…」

「え？」

背後からの声に振り返れば…お姫さまがいた。

蒼いお姫さまが、地面にぺたんと女の子座りをしている。

八雲より少し年下に見える少女はどうやら怪我をしているらしく、脇腹のドレスに赤い物が滲んでいた。

座ったままぽかんと八雲を見上げているのはそれが理由だらうか？

「…フム」

八雲が周囲を見回すと、男達が身をすくめる。

どうもいきなり現われた八雲を警戒しているらしい…連中を一通り見て、再び彼女に視線を落とせば八雲の黒い瞳と彼女の蒼い瞳が交差した。

しばらくそのまま、時がとまったかのように互いを見つめあう。誰もが介入のタイミングを失っていた。

「立てる？」

「あ、ああ…」

八雲が差し出した手に手を添えて、少女が立ちあがる。

「え〜つと、なあ？」

「何だ？」

「逃げるぞー!!」

「え、ち、ちよつと待てお主！なあー！？」

反論があつたようだが問答無用、腰に手を回して抱え上げると一目散に駆けだした。

どうせなら悲鳴も可愛いか色っぽいものを上げると心で突っ込みつつ、それは男の勝手な理想の押し付けかなともちよつと考えながら、少女を抱えたまま脇目も振らずに困いを抜け出して全力で駆ける。

周りにいた男達は、終わったと思つていた所に何処からともなく八雲が現れ、あまつさえ上役がカウンセラーを食らって目を回しているという驚きの連続でとっさに動けない。

いきなり逃げ出すなど予想外でもあつたのだろう。

その迷いが隙になり、八雲達に味方した。

「一体、何なのだお主は!？」

知らないとはいえ、王女であるところのラインをお姫様抱っこしながら、八雲は走る。走って走って走る。

抱えているラインの言葉など無視して、とにかく両足を動かすこ

としか考えていないように見える。文字通りの意味で話になりそうになかった。

「お、おいちよつと待て、このあたりで良いだろう？降ろせ！！」

「ダメ！今止まるともう走れない！！それに死にたくないから！！」
堂々と情けないことを言った八雲に、リインが呆れた：ランナーズハイになっっているようだから、本音が駄々漏れなのだろう。

舗装されていない山道で、一人を抱えているという悪条件まで重なっていながらこけないのは奇跡に近い：ナイス生存本能、人間というのは本当に侮れない生き物だ。

ただし、それはそれでこれはこれ、危険性が理解できる点で出来ないよりむしろ、それにも限度があるだろう。

しかもリインはいまだにロングソードを抜き身のままに持っているので、いつ転んで刃が自分達を刺してしまわないかと物騒で仕方がない。

「埒が明かな…」

やむを得ないとリインは溜息をついた。

「正氣に戻れ、軟弱者！！」

「おう！！」

リインの小さな拳がストレートに八雲の頬を螺旋状に抉った。
両手で抱えられた状態のくせに、腰の入ったいいパンチだ。

Q、人一人お姫様抱っこして全力疾走している状態でそんなモン食らったらどうなりますか？

A、吹っ飛ばに決まっているだろう…馬鹿ですか？

そのまま二人は別々の方向に飛んだ。

八雲の体が錐揉み回転して放物線を描き、生々しい音と共に地面を削ってから止まる。

「フン、ぬわあああ！！！！」

こっちはリインの悲鳴だ。

彼女は放り出されたにもかかわらず、宙で身を捻って優雅に着地……したは良いものの、そのまま衝撃が傷に響いて悶絶した……自分が怪我人だという事を忘れていたのか？

しばしそれぞれのダメージに呻いていた二人だが、復活したのはほぼ同時だった。

涙目な所は二人とも、それぞれ殴られた頬と脇腹を押さえ、ついでにリインは抜き身のロングソードを杖のように持っている。

「なにすんだこら！？犯すぞ！！」

「お主何者だ！？握りつぶされたくなければ答えよ！！」

ぱつと同時に相手から距離を取った……こいつら本当に怪我人だろうか……八雲は微妙に内股になり、リインは手で胸を隠すように半身になる。

二人とも顔が赤く、色々想像してしまっただけ……これが若さか？

「ま、まて……まずは落ち着こう」

「そ、そうだな、まずは落ち着くのが大事だな」

とりあえず、話をしないと何も解決しないだろうという所で意見は一致している。

二人とも、急展開過ぎて少し落ち着かなければやってられない。

そして冷静になってみれば……なんか色々とアレだった。

突っ込みどころ満載だった。

人気のない森の中、まずこの時点でおかしい。

八雲は間違いなく学校の教室にいた。

それが背後を振り返った次の瞬間には森の中である。

ついでに全力ダッシュで息を荒げている八雲と、着ているドレスが色々無残で、あっちこっち裂けて一見襲われ……いや、犯人は八雲では無いが実際に男達に襲われた後の状況でしかも剣を構えている少女……どうみても男として言い逃れできない状況で、自分でもこれを見たら通報するだろうと思うと軽く鬱になる。

「えっと、俺の名前は遠野八雲……」

「八雲？珍しい名だな？妾の名はリイン・アクア。名前からも分かる通り、アクア国の王女だ。危ない所を助けてもらって感謝する」
八雲とリインは互いの名を名乗りあった。

初対面の印象は重要、ある意味それで、今後の付き合いの方向性が決まると言っているかもしれない。

「…王女？」

「……いかにも」

いきなり自己紹介から滑ったようだ。

八雲はいきなり王女と言われてはいそいですかと納得できるほどファンタジーな頭はしていない。

たとえ理解不能なファンタジー状況のど真ん中に放り込まれたとしてもだ。

確かにリインは美人だし、着ているものもかなりボロボロではあるがドレスのようだ：アフターでこの状態なら、ビフォーはかなりものだろうとは思う。

確かにそう言う目で見れば王女に…見えなくもないか？

「どうかしたか？」

気がつけば、リインがなんか文句でもあるのか、ん？という感じの良い笑顔になっている。

どうやら表情から何か読み取ったらしいが、ひょっとして本人も気にしているのだろうか？

「…俺の王女さまのイメージには自分を抱えて走っている人間に、容赦なくいい感じの拳を叩き込む武闘派の要素や、それによって自爆するうっかりさんの要素はないんだけど？」

「う…」

抜き身のままの剣が怖いのが、言いたい事は言わせてもらおう。

女の子が王子さまに理想を抱くように、男の子だってお姫さまに抱く理想と言っているがある。

それを踏まえてリインを見た時、疑問を感じるなと言う方が無茶では無いか？

「しかもいきなり剣を振り回すなんて、王女って言うよりむしろバーサーカーじゃね?」

「し、失礼な、妾の精霊はウンディーネであってバーサーカーではないぞ?」

「…何?」

「…今、何か重大なズレがあつたような気がする。」

「だ、大体! お主こそ何者だ!? 一体何処から現れた! ?」

「え?」

「旅人か? 少なくともアクアの人間ではないのだろうか? そんな黒い髪に黒の目と、見たことのない黒い服まで、ここまで徹底して黒い人間など初めて見るぞ?」

羞恥のラインが話をぶつた切つた揚句、変な方向に話を持って行ったため、八雲の疑問は質問になる前に霧散した。

「……」

「どうした? 何か言いづらい事でもあるのか?」

「いや…言いづらい事かどうかさえ分からないって言うか…」

「何?」

八雲の返答でラインがいぶかしげな顔になるが、これは仕方がない。

いきなり見ず知らずの森の中に放り出されて、しかも修羅場のど真ん中、成り行きで助けたのがお姫様? 何が起こつたのか、何故いきなりこんな場所にいるのか、一番聞きたいのは八雲本人だ。

ラインの質問に答えられないのも道理である。

「俺にも何が何だか、わけが分からないとしか言えない。そっちこそ何でいきなり襲われていたわけ?」

「……」

「えっと、ひよっとしてそれって聞かない方がいい事?」

事情を聞こうとしたら沈黙が返つて来た。

その無言の意味を察せないほど鈍くはないつもりだ。

「そう…だな、おそらくこれは…」

案の定、リインがつらそうな顔になった。

その理由までは初対面の八雲には知り得ないが、それでもリインが悩んでいるのは分かる。

原因に心当たりはあるっぽいけど、だからこそ口に出れないのかも
しれない。

「これは、アクア国の問題だ」

「アクア？　そう言えばアクアってなに？」

確かリインは自分の事をアクアの王女とか言っていた。

嘘か本当かは知らないが、しかし八雲にはアクアという国に聞き覚えはない。ただそれだけの疑問を聞いただけなのだが、リインにはこいつ何言っているんだという目で見られた。

「お主…何で四国を知らんのだ？　頭が悪いのか？」

「……」

きつとどこかでぶつけたかどうかを聞いたのだろう。

頭を抱えたい心境なのは確かだが、頭の悪い子のような言い方は
されたくない。

「本当に知らんのか？　四国を知らない人間がいるとは思わなかった」

「そう言われても、知らない物は知らないしな」

八雲の知っている四国は、徳島・香川・愛媛・高知の四県で、そこにアクアなどと言うものは含まれない。

何より県を国とは言わないだろう。

からかわれているのかとも思うがしかし、リインの蒼い瞳の中には本気で心配そうな色がある…冗談でも何でもなく、知らない八雲の方がおかしいと思っている目だ。

おそらくだが、二人の間で話が通じないのは、リインがきつと知っていて当たり前”な事を前提として会話をしているからだろう。それを八雲は知らないものだから、それがそのまま両者の理解のすれ違いに繋がっているようだ。

「お主本当にこの世界…アヴァロンの住人か？」

「……え？」

今のラインの言葉の中に聞き捨てならない単語が含まれていた事に気づいた八雲が言葉を失ってしまった。

ラインは…この世界を“アヴァロン”と呼んだのだ。

「…つかぬ事を聞くけど、四国の国名は？」

「アクア、フレイルム、アース、ウインド、それぞれが水火地風の精霊を冠している」

ビンゴ、嫌な予感程良く当たるというジンクスは実在するようだ。しかも、精霊なんて、八雲の常識では実在しない単語が混じっていた。

これが全て何らかのドツキリだったら、八雲一人を騙すためにどっだけ無茶してんだよ！？と言うだろう、っというか叫ぶだろう。

そして、八雲は自分の事をそこまでしてドツキリさせたいほど価値のある人間だなどと過大評価はしていない。

あり得ない可能性を排除していくと、残った物がどんなに常識はずれでもそれが真実と言う事になるらしいがしかし…ここから導き出される答えと言うのは…。

「ま、まさか…」

「まあいい…今はそんな些事にかまけている時間はないのだ」

「え？」

辿り着いた答え（予想）にうめくが、ラインは八雲の苦悩を無視して…と言うか気づきもせずに話を進める。

「ぼつつとして居る暇はないぞ、忘れたのか？妾達は追われているのだ？」

「ああ…」

本当ならこんな風に立ち止まって話をしている時間さえ惜しい絶賛逃亡中、何で追われる事になっているのか、その理由さえ知らなくとも、現状は変わらない。

忘れていたわけでは無いが、状況さえ理解できていない上に平和に慣れた日本で育った八雲にとって危機感が足りないのも確かだ。

「八雲、お主もこのまま終わるとは思っていない？」

「それは…」

男達はリインを襲撃していて、そして八雲は連中の目の前からリインを攫った。これで穏便に済むと思う奴は相当な脳腐れだろう。

リインの言うとおり連中は“妾達”を追ってくる。つまり複数形で、そこには八雲も含まれるわけで。既に八雲とリインをセットだ。「救ってくれた事には感謝する。しかしこれ以上妾の傍にいれば死ぬぞ?」

「う……」

冗談を言っているわけでは無いと、リインの表情が語っている。

少なくともあの男。キョールは本気だった。

本気でリインに殺気じみた狂気を叩きつけていた。

八雲がいなければ、あの男は本気でリインを。そして八雲にとっても他人事ではない。

追いつかれれば、見つければ、今度は八雲にも同じ物が向けられるはず。いや、八雲に対しては遠慮がいらぬ分、本気で殺しに来るだろう。

死ぬかもしれないと断言されて、それで動揺しないほど八雲は鈍感では無かったし、自分から死にたいと思うほど物好きでも、世を憐んでもいないつもりだ。

「だ、だからってどうしろって言うんだよ?」

とはいえ、どこに行けばいいのかすら判らない八雲は圧倒的に選択肢が少ない。

そんな内心を読み取ったのだろうリインは、一つ頷くと身につけていた指輪やネックレス、イヤリングを外し、まとめて八雲に手渡す。

「他の物は全てやる。売って金にするがよい。だが、この指輪を…アクアの王城に届けて欲しい。そして保護を求めよ。妾にはリインという名の妹がいる。あいつならお前の事を悪いようにはしないはずだ」

最後に渡された指輪には宝石や装飾はついていなかった。リインくらの少女がつけるには無骨なデザインの蒼い指輪だが、その代わり指輪の中心には水を模った装飾が成されていた。

「……………」
知識のない八雲には指輪がどう言うものかはわからないが、物を知らなくても分かる事はある。

「死ぬ気かよ？お前、人には死にたくないだろ？とかさっき言ってたよな？」

案の定…あるいは予想通りにリインはフツと笑った。

「責任ある身として自害も視野に入れている。折角助けてくれたのに悪いがな」

「あれは成り行きで…それに自害？討ち死にじゃなく自殺か？なんで？」

彼女も、自分と同じで自殺願望がある人間には見えないのだけだ。ど…。

「いや…連中に捕まっても命までは奪われんだろう…死んだ方がましという状況にはなるが…とりあえず手足の切断くらいはされるだろうな」

「それは…」

八雲は絶句するしかなかった。それが最低ラインなら、確かに死んだ方がましかもしれない。

本当に死んでいないだけの状態ではないか？

「この程度は基本だろう？チエンジリングの力を奪う方法は多くない。一番手っ取り早いのは、ウンディーネと取り替える四肢を切断することだしな、そんなのはごめんなのだよ」

チエンジリング？ウンディーネ？…また八雲には理解できない固有名詞だ。困惑する八雲の気配をリインが察して頷く。

「わからなくてもいい、重要なのは連中の目的が妾だということだ。一緒にいなければ、お前は連中の眼中にはない。十分逃げられる」
「だから自分が困になろうって？」

それは何というか：自己犠牲が過ぎるのではないかと思うのだが？
「どの道逃げられんよ、この傷だし、毒も抜けていない」

脇腹からの出血は止まっているようだが、その顔色は悪い。軽い貧血になっているかもしれない。

「判っただろう？足手まといなんだ。それに、妾の死に意味がないわけでもないぞ？」

……自分が死ぬかもしれないというのに、それなのに誰にも、目の前にいる八雲にさえすがらず、あっさりと笑いがならそんな事を言える彼女の心理を八雲は理解出来ない。

死ぬ事に、どんな意味をこの少女は見ているのだろうか？

「さあ行け、アクアは…多分あっちだ」

結局、八雲にはその答えを見つける事が出来なかった。

リインが自分の血に濡れた指で一つの方向を指す。

地理どころか東西南北もどつちかわからない八雲に知る術はないが、おそらくその方向に彼女が言う所のアクアがあるのだろう。

それを見た八雲は一度大きく頷いて…ブチツときた。

「見よう見真似ちよっつぷ!!」

「な!？」

八雲に釣られ、同じ方向を見ていたリインの頭に不意打ちのチョップが叩き込まれた。

あまりにも油断していたところに来た一撃に、かなりいい感じの音がする。

「ちっ、威力不足か？やっぱ見よう見真似でコマ先生のようにはいかんよな〜」

「な、何をする!？」

リインがチョップを食らった頭を押さえて涙目になって抗議してきたが、逆に八雲は半眼で睨み返した。

「やかましい。黙れ馬鹿」

「ば、馬鹿!？」

今度はリインの方が面食らう番だった。

こんなストレートな罵倒など受けた事自体が初めてなのだろう。しかも、冷静で淡々としている…ように見えてその実、八雲は怒っている。

「どれだけ俺を鬼畜に見ているわけ？そんなもん聞かされてはいそうですかなんて終われないだろ？」

「し、しかしだな、これが現状では一番助かる可能性が…妾の事は気にするな、これでも覚悟は…」

「追撃のちよっつぶ!!」

「会話をする気がないのか貴様!？」

切れているらしい八雲は横暴だ。

気がつけば、八雲のチョップを白刃取りしているリインという、誰が見ても何だこりやな状態になっている。

本当に、さっきまで死ぬのは嫌だとか素面で言っていた人間と同一人物か？

「アンタの死にどんな意味があるか知ったこっちゃないし、自分の命をどれだけ安く見ようと勝手だけど、それに俺まで巻き込むな」

「い、いや…妾は…そんなつもりは…」

「つもりがあるのが無かろうが、言っている事はそう言う事だろ？」

八雲はリインの言葉に本気で怒っているようだ。

真正面からにらまれたリインがタジタジになる。

リインは間違った事を言っただけでもない。

この状況で、八雲という巻き込まれた人間を生かすために、最善な行動であるのは疑いようはないのだから、しかし当の本人にこうまで反抗されるとは思っていなかった。

「し、死ぬのは嫌なんだろう!？」

「誰かの命を背負って生きていけるほど強くもないんだよ俺は!!」

「何だそれは!？」

堂々と情けない事をのたまわれ、思わず突っ込みを入れてからリインはクラっときた。

誰かが犠牲になって自分を生かす事になれば、犠牲者の死は呪い

のようにその後の人生に影を落とす事を、リインだって知らないわけでは無い。

知らないわけではないが、それを堂々と背負えないと言った拳句、情けないオチまでつけられた。

「誰かを見殺しにして生きてたら後味が悪すぎるだろうが！！そんな重いもん押し付けろんじゃねえ！！」

「そ、それこそ個人的な理由では無いか！！」

「それがどうした！？」

「ひ、開き直るなー！！」

八雲と言う人間は、完全にリインの理解の外にいた。

互いに譲らない物だから話がすれ違いまくっている。

「動けないって言うなら担いででもアクアって国に連れて行ってやる」

「八雲：それはお前の意地か？…それともやけっぱちになっているのか？」

何故そこまで言うのかリインには理解できないが、一つだけ言えるのは、八雲は本気でリインを担いででもアクアに連れて行くつもりだという事だ。

「俺の精神衛生の為だ」

「ほんつきで言っているだろ！？何処までも自分本位だな貴様…」

「悪いか？それで他人に迷惑をかけた覚えはねえ…」

「悪いかどうかと言われれば…微妙だ。」

あくまで今の所はという但し書きがつくが…。

「何なのだお主は…」

言い知れぬ無力感を感じて、リインは座り込んだ。

話を通じないというか、どこまでも平行線なやりとりをやたらと疲れを感じる。

「まだ追い詰められたわけじゃないんだろ？もうちょっとだけ足？
いてみようぜ。それでどうする？俺は担いでいく気満々なんだけど？」

「戯け、一国の王女が荷物のように担がれてたまるか。自分で歩く…その代わり責任は取れよ」

ため息とともにリインが折れた。

すでに時間を食っている…長話をする時間も限界だろう。

まだ追手の気配は感じないが、案外近くまで来ているのかもしれない。

「善処はする」

「そこは男らしく責任は取ると言えんのか？」

「そういう人間だから、俺」

やれやれとため息をついたリインは、自分に向かって差し出された八雲の手に自分の手を重ねた。

顔には苦笑が浮かんでいたかもしれない。

「あ、あれ？」

その疑問符は八雲のものだっただろうか？それともリインのものだったのだろうか？

喉の下からあがつてくるものを感じた八雲が気持ちの悪さに抗えず、こみ上げてきた物を吐き出せば、二人の間の地面が真っ赤に染まった。

「や、八雲？な、なんだそれは？」

今度は間違いなくリインの声だった。

彼女が呆然と自分を見ているのに気がついて…その視線を追いかけてみれば自分の鳩尾にたどり着き……真っ赤に染まった鉤爪が見えた。

八雲に見られたからというわけではあるまいが、鉤爪が八雲の体の中に引っ込み、背中から抜けた次の瞬間、八雲の前後からおびただしい血が流れ出す。

貫通していた鉤爪が引き抜かれた事で前後両方の傷口から一気に血が流れ出したのだ。

「八雲！！」

倒れようとした八雲の体をリインが抱きしめて支える。

既にリインの血の色に変色していたドレスが、八雲の血を吸って更に色を濃くした。

「すまないね、少年、姫様を連れて行かれると困るんだよ。依頼が果たせない」

木の上から飛び降りてきたのは、変わらず糸目を弓なりに曲げているキュールだ。

遅れて他の連中も駆けつけてきて周囲を包囲する。

「貴様どうやって気取られずに…」

「簡単ですよ。まとも近づいては気取られると思ったので、上からこつそりと忍び寄っただけです」

そう言つと、キュールは長腕のネリーの手を伸ばして上のほうの木の枝を掴む。

「水の邪妖精が森の獣の真似事か!？」

「種を明かせば大したことではありませんが、便利でしょう?」

「悪びれることなくそう言つと、視線をリインから八雲に向けた。」

「即死させてやれなかったようですね?」

キュールが残念そうに呟いて、大げさに肩をすくめた。

八雲を胸に抱いたまま、リインが怒りの視線でキュールを睨む。

「ひと思いにと思つていたので…かわいそうな事をしました」

演技臭い動作で肩をすくめるキュールに、もはや口をきくのも不愉快と、リインを中心に蒼の力が集まってくる。

「宜しいので? チェンジリングの初歩を知らないわけではないでしょう? そんな状態でウンディーネの制御など、無茶をすれば命に関わりますよ?」

「貴様の知ったことか! そのにやけ顔を止めてやる。来い、ウンディーネ!」

八雲を抱きしめたまま、リインは己の中にいる存在の名を叫んだ。

…死ぬな。

ラインの胸に抱かれた八雲はそんな事を考えていた。傷は背中を中心に貫き、背骨を粉碎して内臓を抉り、前に抜けている。

医学知識があるとなかろうと完全な致命傷だと理解できる…出来てしまう傷だ…おそらく心臓も傷ついているのだろう。

不幸中の幸いというべきか不幸というべきか、即死にはなっていないらしい…あまりにも傷が深すぎて脳が痛覚を麻痺させているので、殆ど痛みは感じない。

…こりゃダメだ。

死が確実とわかると、生存本能もへつたくれもない。

むしろ色々な物に対して執着が薄れるものらしい、己の生死すら冷静に見る自分がいる。

周りで何か言いあっているようだが、声がやたら遠くに聞こえるので言葉がわからない、頭が上手く働かない。

ラインがかなり感情的になっているだろうという事は、八雲の体を力いっぱい引き寄せる動作でそれと判かるのだが…今更だが、彼女には悪い事をしたと思う。

せつかく忠告して逃がしてくれようとしたのに、八雲だけでも助けようとしてくれたのに、突っぱねた結果がこのざまだ。

自分が間違っていたとは思わないが、そんな彼女の気持ちを無駄にってしまったことだけは申し訳なく思う。

タスケテ

…え？

朦朧とする意識に、その声は驚くほどはっきり聞こえた。

オネガイ、タスケテ

幻聴では無いようだ。
救いを求める誰かの声が聞こえる。

…お前か？

霞む視界の中で、何故かラインの背後に立つ蒼い騎士の姿だけがはつきりと見えた。

…確証など何もないが、騎士が瞳だけで自分を見ている気がする。理屈ではなく、直感的な部分で理解した。

マスターアブナイ…マスター、タスケテ

…マスター？ラインの事か？

ラインの背後に立っているから、おそらくそうだ。

八雲だって、本当にこのままでいいと思っているわけではない、むしろこのままでは死ねないと思っている。

自分で他人に死ぬ事の重荷を押し付けるなと啖呵を切っておいて、自分がラインの重荷になるなんてまっぴらごめんだし格好が悪すぎる。

彼女が八雲の死に責任を感じたり、泣いたり怒ったりするのは…何か違うだろう。

何より目の前でひどい目にあわされそうな女の子を放って置くなど、男として以前に人間の汚券にかかわる。

このまま死んだら絶対後悔する。
心残りで自縛霊になるかもしれない。

…でも、こんな俺にどうしろって言うのさ？

だがしかし、現実是非情で、起こってしまった事は覆せない。
今の八雲の体はほとんど死に体だ。
おそらくはもって後数分の命…それが真実で事実で現実だ。

チカラ…カス…ツカツテ…マスタータスケテ

騎士は本当にリインを救いたいらしい。
どう見ても高位っぽい存在なのに、言葉に懇願が滲んでいる。

アナタナラデキル…アナタニシカデキナイ

…まあいいか、解った。

八雲はもともと物事に対して深く拘らない性格だし、必要以上に執着もしない。

本人が使えというのなら使えるのだろう…使えなくてもこのまま死ぬだけならば大した差はない。

これで終わりというのなら尚の事…それでリインが責任を感じなくて済むのなら、それだけで理由は十分、足掻く価値はあると思う。

…リインにも責任を取れって言われたしな…。

自分の吐いた言葉の責任くらいは取らねばなるまい。

嘘は必要なときにしかつくべきではないし、少なければ少ないほどいいのだから。

アリガトウ

騎士の声には喜びの感情が含まれていた。

同時に、死にかけている自分の中に、異質な何かが入ってくるの

を感じる。

…なあ？

ナニ？

…俺をこの世界に呼んだのは…お前なのか？

……。

否定でも肯定でもない…沈黙という返事には、どんな意味があったのだろうか？

「何!？」

リインは思わず驚きから声を上げた。

いつも感じているウンディーネとの一体感がいきなり途切れたからだ。

こんな事は今まで一度もなかった。

怪我のせいで同調率が下がったかと思っただが、ウンディーネは変わらずそこにある。

「…馬鹿な」

リインは信じられないものを見た。

確かにウンディーネはそこにあり、そして取替えをしようとしている…しかし、その相手はリインではない。

ウンディーネが溶けるようにして降りてゆくのは…八雲の中…あり得ない。

その異常性を見て理解した男達も、啞然として成り行きを見守っている。

やがて、ウンディーネの体が完全に消え去り、蒼い粒子が八雲を包み…”全身”が取り替えられた。

「オ…オオ…」

低い獣のような声を上げながらリインの腕からはなれ、立ち上がったその姿に、八雲の面影はまったく無い。

あるのは完全な形で実体を得た蒼の騎士…ウンディーネ…リインはしっかりとした実体を持ち、両の足で大地に立つ自分の精霊を見て、震える声を漏らした。

「まさか…リミット…ブレイク？」

啞然とした声には畏怖と…恐怖が含まれていた。

転（後書き）

チェンジリング
取り換えっ子

精霊・妖精に取り付かれた人間を指す。

自身に取り付いた精霊・妖精と肉体を取り換える事でその力を行使する。

精霊・妖精が宿主を選ぶため、努力や才能だけでなれる物ではないが、チェンジリングになった後、その力を使いこなすには才能と努力が必要となる。

取り換えには自分に取り付いているものとの同調が必要であり、同調率が高いほど多くの部位を取り換える事が出来、多く取り換えるほど扱える力も大きくなる。

チェンジリングを拘束する方法は多くないが、肉体が欠損した場合、その部位との取り換えはできなくなる。

結

「くそ!!」

大柄な体躯を持つ騎士の鎧を着た男が、森の中を全力で駆けながら悪態をついていた。

「不覚!!このランド・カルア一生の不覚!!」

己の不甲斐無さに、憤死しそうになる苛立ちを、手近な木に叩きつけた。

彼：ランド・カルアはアクア国の王女、リイン・アクアの護衛騎士だ。

急時にはリインを守り、盾となる義務があるが、そんな物がなくともランドは主であるリインに心からの忠誠を誓っている…そここそ命を賭ける覚悟もある。

時々、リインから「お主、ちょっとどころではなく暑苦しいぞ?」と言われるのだが、それは忠誠心の高さ故なのでランド的にはまったく何も問題ないか思っていたりもする男だ。

だがしかし、守ると誓いを立てた肝心のリインは今、ランドの側にはいない、護衛の一人もつけず、この深い森の中をさまよっているはずだ。

リインの”お披露目”自体は何の問題もなく終わり、帰りの道程だと言う事で自分を含めた護衛団に弛緩した物があったのは確かだ…そんな気の緩みを衝かれた。

リインを乗せていた馬車と自分達の間には岩を落とされ、慌ててリインの元に駆けつけようとしたところに、更に盗賊風の一団に割り込まれてしまった。

「いや、今は姫を探すのが先だ」

過去は変えられない。

今この時に何を言おうが所詮、言い訳にしかない。

反省は後でも出来る…幸い、リインが馬車から脱出して森に逃げ

込んでいったのは見た。

残念なことに連中の一部が追いかけていったのも見えた。

いくらリンがウンディーネを宿したチェンジリングとは言え、“同じ”チェンジリングであるランドには、その力が必ずしも絶対ではない事も知っている。

「おのれ下種な襲撃者共め…姫を捕らえてどうするつもりか！」
何を想像したのか、ランドが急停止して歯軋りしたポーズで固まる。

「ゆ、許さん！！姫の貞操はこのランド・カルアが守る！！…によぼぼ！！」

ゴツンと…形容すればそんな音がランドの頭上でした。
見れば結構大きな石がランドの頭に絶妙なバランスで乗っている…つまり、石がランドの頭上から落ちてきたらしい。

石の質量は当然、重力に引かれ下方向のベクトルを持つ…重さがそのまま衝撃となり、頭頂部から顎の下に突き抜け、ランドに地面との熱烈なキスを強要した。

石と地面の間でサンドイッチになったランドの頭の上で、結構硬そうな石が真っ二つに割れる。

ランドの石頭と天然の石の勝敗は石頭に軍配が上がったようだ。

「く、ぬぬぬ…また不意打ちか！？おのれ卑怯ものめ！！姿を見せよ！！…ぶぼ！！」

痛みに耐えて起き上がろうとしたランドの根性は感動的だが、その頭を今度は素足が踏みつけて地面とのセカンドキスを強要する。

「ランド？貴様…誰のどんな姿の妄想を抱いた？」

降って来たのは聞き覚えはあるが、絶対零度の声だった。

「ひ、姫？」

何とか首を曲げて横目で見上げれば、捜していた当人がいる。

折角のドレスは所々が裂け、彼女の素肌が覗いて見えるし、血まみれだが五体満足に両の足で立っている。

彼女が無事なものには安心したが…敬愛する主は薄ら笑いの怒り顔

というなかなか難しい表情でランドを睨みつつ見下している…ア
レはケダモノを見る目だ。

「…私の人に言えぬ姿は鼻から血を流すほど過激な物だったのか？
さすがにちよつと鳥肌物だな。奥方にチクツて良いか？」

「それだけは平にご容赦を！…まだ新婚一カ月なのです！…」

ランドが必死で弁解する。そんなに嫁さんが怖いのだろうか？

「ってあ…いえ、これはですね…妄想の産物と言うより、二度の地
面とのスキンシップの成果というか…」

「ほう、地面と親愛の関係を築けるとは、私には全然真似できぬな
あゝ」

ラインの嫌みに、ランドはうつ伏せの状態で汗をだらだら流した。
ラインの様子がおかしい。

こんな彼女を見たのは今回の旅に出かけるための荷造中、一部を
ぶちまけてしまった時以来だろうか？…ぶちまけてしまった荷物が
下着一式だったのが最悪だった。

ウンディーネのランスで突き殺されそうになったときには本気で
死を覚悟したが、目の前のラインはそのときに勝るとも劣らない。

「ご、ご無事のように何よりです。中々先鋭的で扇情的なドレスで
すね？過激な装いもお似合いです」

ラインの機嫌を取る為に服を褒めてみたら…また踏まれた…四回
目だ。

しかもグリグリと足を捻られ、地面で顔がヤスリ掛けされてうめ
き声も上げられないほど真面目に痛い。

このままでは何かに目覚めて、人生がとんでもない方向に折れ曲
がってしまいそうな気がして来た…これまた離婚に勝るとも劣らな
い危機を感じる。

女性の機嫌を取りたければ、まず服等を褒めると新妻に言われた
事を思い出して実践しただけなのに…。

「ご、護衛の任を果たせず申し訳ありません！…」

「ん？ああ、そんな事気にしておらぬぞ？」

「はい？」

気にしていない？…つまりリインはランドを責める気はないと？
確かに、彼女ならばあの状況は仕方がないと理解してくれるだろう。

しかし、それならばリインの機嫌が悪い理由が分からない。
何とか解放してもらおうとランドは身をよじってリインを見上げた。

「おや、姫様？何時の間にそんな大胆な下着を着るようになったのです？」

まあ……頭を踏みつけられた状態で上を見上げれば、スカートの
中身が見えてしまうのは当然である。

「……」

「城を出るときに広げてしまった物の中にはなかったように思いますが？具申ですが、姫のような年齢の女子には少々冒険と背伸びの
し過ぎかと」

「……」

「おぶー！！」

無言になったリインの爪先で頬を思いっきり蹴りあげられ、ひっ
くり返ったランドは問答無用でマウントを取られた。

腹の上にリインがいるという官能的なポジション取りだがしかし
…そこにアダルティな要素は皆無だ。

むしろ今のリインには、獲物にとどめを刺そうとしている雌の肉食
獣が幻視出来る。

リインは極上の笑いのまま、女性優位な体位から、固めた鉄拳を
下敷きにしたランド相手に振るった…何発も…。

「…ランド？お前の嘘をつけない性格は妾も好ましいとは思って
いる」

「ヴァイ」

「だが同時に、妾は常々もう少しデリカシーその他を身に付けると言っているよな？よもや忘れてはおるまい？」

「ヴァい、むおうしヴァあけありません」

リインの前に立つランドは顔を蒼瘧で飾り、笑えるくらい盛大に鼻血を流していた。

ランド・カルア…この男は嘘のつけない性格のお陰で信頼は置けるのだが…思った事をすぐに口にする悪癖だけはどうかしてほしいと本気で思っている。

恥女では無いリインとしては、決して下着を黙って覗いているとは言わないが、もう少しオブラートにくるんでほしいとは思っただ…っと言うか包むべき状況と話題だろう。

王族だろうが平民だろうが、女の子の心はデリケートなのだ。

「本当に今日は厄日だな…」

俊足の…何だったか？

とにかくそいつと言いつつランドと言いつつ…一日に二度も異性に下着を見られてしまうとは…しかもよく似た状況で、乙女のプライドとか羞恥心とかポロポロだ…などとリインが考えている間に、ランドの鼻血が止まっていた。

「これだから地属性は…」

ランドは地属性のチェンジリングなので、その恩恵により身体能力は人一倍頑丈で高い。

回復も早いので、ついつい八つ当たりも込めてやりすぎてしまうのはリインの方の悪い癖だ。

今のところまったく良心が痛まないのは、相手がランドだからと言つ一言に尽きるが…このまま慣れてしまつては、思い余って他の誰かに似た対応をうつかりやらかしてしまわないか心配になる事もある。

「さて、冗談は…いい加減このあたりにしておこう」

切り替えなければ話が進まない。

じゃれあいや漫才の前に、やらなければならぬ事は山積みなのだ。

「はー！」

ラインの言葉に、ランドが騎士の顔になる。

さっきまでの三枚目はどこかに行ってしまったようだ。

「残りの襲撃者は既に殲滅済みです」

「後は私を追ってきた連中だけと考えると良いか？」

「御意」

「…被害は？」

「数人、剣で切られましたが命にかかわる者はいません。今は最初に襲撃された場所で治療を、残りは姫を探しに森に散っています」

ランドからの報告を聞いて、ラインは頷いた。

「思ったより被害が少ないな、よくやってくれた」

「いえ、それよりまだ襲撃者の生き残りが？」

「ああ、とは言え十人にも満たんが、後は私が手にかけて」

「そう…ですか…」

返答を聞いたランドは複雑な思いだった。

致し方なかった状況で、ラインにそれを撃退する力があればそれを振るうのは必然だ…結果相手を殺害する事になったとしても、そしてラインはそれを気にしていない。

血にまみれようと躊躇なく剣を振るい、ウンディーネの力を振るったのだろう。

だからこれは、ランドの勝手な感傷だとわかってはいるが、本来ならば蝶よ華よと愛でられるべき少女が、こんな血まみれで泥だらけになり、死臭を纏わりつかせている姿には胸が痛む…しかし、ここは未だ戦場の中…ランドは感傷を殺してラインに問いかける。

「いかがなさいますか？このまま残りを殲滅するか…捕虜にして情報を得ますか？…む？」

ランドがラインを問いただそうとして…できなかつた。

近く…今いる場所からさほど遠くない場所から聞こえてきた怒号

と悲鳴…ランドはこれを知っている。

これは…戦闘の音だ。

ランドに聞こえた音がリインにも聞こえないはずもなく、彼女もランドが振り向いたのと同じ方向…つまり自分^{リイン}がやって来た方向を見ている…その顔が悔しげに歪んでいた。

「チツ、連中…耐え切れなくなって仕掛けたな!？」

「姫、一体どういう…何が起こっているのですか？」

「…このままここにいろ……といっても聞くまいな？」

「当然です！何をおっしゃっておられるのです!？」

問いかけに対する答えは即座に返って来た。

折角見つけたのに離れてたまるかと言う気迫も見える…これはだめだ。

引き離そうとしてもついてくるだろう。

「やむをえんか…」

リインは諦めた。

今のリインは無力で、どの道護衛は必要だろう。

それならば、巻き込む相手がランドと言うのは悪くない。

「ランド、今日これから見るものは他言無用だ。もしどこから漏れたなら、お前の命をもらっ」

脅しでない証拠に腰の剣に手をかけ、殺気を放つ。

ランドもそれを見て、内容は理解できなくても、事の重要さを悟ったようだ。

冷や汗をかきながら…それでも退く気はないという顔をしてランドは頷いた。

「御意」

「…行くぞ…きっと信じられないものが見れるはずだ」

要領を得ず、何の情報も得られなかったが、ランドはリインについて駆け出した。

そしてほどなく彼は、リインが言ったとおり、信じられないものをその目で見ることになる。

目の前にいる異形に対する恐怖：そしてそれに背を向けたくないという二律背反はリインの逃亡を許し、襲撃者達の忍耐をがりがりと削り、限界に至るまでそう長い時間はかからなかった。

最初の一人の緊張が切れるとなし崩しに全員に伝染し、彼らは自分の武器である剣を構えて中央に立つ　八雲：ウンディーネに殺到する…殺気、怒声の渦の中でしかし、中心にいるウンディーネだけが“水のように”静かだった。

向かってくる数本の鉄の輝きに大して、ウンディーネは動かない。文字通りの意味で指一本、身動きさえしなかった：剣は何に遮られることなく、ウンディーネの装甲に当たり、甲高い金属音、火花、そして破砕音を奏でる。

「そんな!?!」

「うそだろ!?!」

ウンディーネは本当に何もしていない。

ただそこに立っていただけなのに、それなのに襲撃者達の剣は折れ、反動で腕の筋を痛めた者もいる。　精霊や妖精の事がある程度知る者にはほぼ常識だが、彼等のの装甲は属性による強弱こそあるものの、ただの鉄に切られる代物ではない。

「……」

不動だったウンディーネだが、いきなり動いた。

右手のランスを自分の死角に向けて振ると、金属同士が弾きあう音と共に何かを迎撃される。

「クッ!?!」

弾き返されたのは蛇のように長く伸びた腕：長腕のネリーの腕、苦い表情で舌打ちしたのは腕の持ち主であるキュールだ。

性懲りもなく死角からの不意打ちを仕掛けたものの、完全な形で反応され、逆に体勢が崩れる。

生まれた際にウンディーネが攻勢に出た。

足型をつけながら地面を踏み砕き、一瞬でゼロからトップスピードに至ったウンディーネに、周囲にいたものは誰もついてゆけない。リインも早かったが、この動きはそれを越えている。

ほとんど瞬間移動のレベルでウンディーネがキュールの目の前で移動した…これが全身を取り替えたチェンジリングの…精霊の力なのか？

「ぐお！！」

間一髪…キュールがしのげたのはウンディーネの軌道があまりにも真つ正直な直線移動だったから…それでも尚、来ると感じた瞬間に全力で守りを固めて受け止めていながら、轢き殺されそうになるほどのプレッシャーにキュールの体は軋み、苦悶の音が漏れる…スビードだけではない、明らかに膂力も増している。

「貴様…貴様は何なんだ！？」

キュールの人を馬鹿にしたような口ぶりが崩れている。

糸のような目は限界まで見開かれ、ウンディーネを睨みつけてはなれない…いや、これは恐怖で目を離す事が出来ないのだ。

チェンジリングであるキュールには、自分が相手をしている存在の異質さがなおの事理解できるから余計に…何故ならば、今目の前にいる存在を…その名前をキュールは知っている。

知っているからこそ信じられない。

それは、チェンジリングの御伽話の中だけの“存在”のはずだ。

「何で、よりによってこんな所に【リミット・ブレイク】が出てくるんだ！！！！？」

ウンディーネの振るう槍を避けながら、戦慄の中でキュールは思う…目の前にいるのは正しく化け物だ。

「く、クソツたれが！！」

ならば攻撃させなければ良い。

いかにランスが長いとは言え、射程距離は長腕のネリーのほうが長い。

既に突撃態勢に入りかけているウンディーネに向けて、キュールは腕の伸縮を繰り返し、それによって弾幕を張る。

突っ込んでくれば鋭い爪で無数の穴が開くだろう。

「……」

だが…ウンディーネはやはり一直線に来た。

その軌道も変わらないが、先ほどまでの特攻と違うのは、槍を前に突き出すのではなく、頭上に大剣の如く振り上げている事だ…そして激突…血が舞う。

「う…ぐ…」

「……」

二人がすれ違い、片方からは呻き声が上がリ、もう片方は無言…そして両者の中間にボトリと落ちた物は…腕だ。

肩口から切断された人間の左手、切り口からは赤黒い血が流れ出していた。

「ぐ…があああ…!」

耐え切れず悲鳴を上げたのはキュールのほうだった。

振り返ってそれを見るウンディーネの胸には切傷がある。

キュールが腕一本を代償に勝ち取った戦果だが、致命傷には程遠いそれは瞬く間に塞がり、鎧は元の形を取り戻した。

実体を持った精霊そのものであるウンディーネは生半可なダメージはダメージになり得ないらしい。

「う…あ…」

呻くような声は周りを囲んでいる男達から聞こえた。

全員が震えている。

「い、いやだ…何でこんな化け物の相手なんかしなきゃならないんだよ!？」

「こんな事、聞いてないぞ!!」

「お、お前達…」

まず一人が逃げ出し、それを引き金に他の連中も悲鳴を上げてウンディーネから逃げ出し始めた。

「え？な、ええ？」

リインは隣にいるランドが、ウンディーネと自分を交互に見るのを無理のないものだと思う。

ランドでなくても混乱するのは必至、かくいうリインも平常とは言い難い。

隣のランドがあわててくれているので取り乱さずにすんでいるが、キヨールはそうはいかない。

【リミット・ブレイク】…そして本来のチェンジリングでは無い者によるウンディーネの取り換え…どちらもあり得ない事だ。

そんなあり得ない物を目にした驚きがなければ、あの男ももう少し冷静な戦術を組み立てられたらどうか？…いや、それでも遅いか早いかの差でしかないのかもしれない。

「ひ、姫？お伺いしたい事が…」

「無理だ。…いや、答えないと言う訳でなくて、今お前の感じている疑問の答を私は持っていないのだよ」

「さ、左様ですか…」

答があるとすれば、誰より先に知りたいのはリイン自身だろう。

あそこにいるのは他ならぬ自分の精霊なのだから…。

「れ、連中は統制を無くして逃げ出し始めているようですが…いかがいたしましょう？」

「あ、うん…あいつらをこのまま逃がすわけにはいかんな…ランド、逃げた連中を追え、一人も逃がすな、そして最低一人…できれば二人は生かして捕らえろ、背後を洗うために必要だ。口が利けるなら後は構わん」

それを聞いたランドの顔に影がさすのをリインは見逃さない。

この男に甘い部分があるのは先刻承知だ。

尤も、甘いのは敵に対してではなく自分達に対してだと言う事も

分かっている。

「主命である。行け」

「御意」

平時ならそれを笑ってもやれるが、状況が状況だ…構っていられない。

一瞬でランドが戦士の顔になる。

彼もチェンジリングだが危険がないと言えないのはリインが自身で証明した…甘さは今は必要ないのだ。

「姫は？」

「今の私は役立たずだ。ここにいる」

そう言ってリインはウンディーネに視線を戻す。

「…忘れるな、ここで見たことは他言無用だと言った事を…誰かに話せば、その首撥ねる」

冗談でも嘘でもない。

目の前で展開されている光景は、そうまでして秘匿しなければならぬ物だ。

そして必要があれば、リインはその立場と責任から彼の首を落とす必要がある、覚悟を決めねばならない。

「…ご安心ください。その時は姫のお手を煩わせる事無く、自分でこの首を搔っ切りますので」

「……馬鹿が、お前が誰にも喋らなければ良いだけの事だろう？」

ランドは答えず、無言で頭を下げて駆けて行った。

リインは去ってゆく部下の背中を見ない。

「くそ…不器用者め…」

それはランドに向けたものだろうか？

それとも己自身に対するものか？

リインは間違っていない…それは確かだ。

”精霊”であるウンディーネの持つ意味は一国の…アクアの未来まで左右しかねない代物であり、騎士一人の命には比べられない。

それが王女としての正しい判断だ。

ただ：公と私を使い分けるには、彼女はまだまだ経験が足りないだけの話で……リインは色々な物を振り切る為に頭を振った。

「今はウンディーネだ」

それだけ考えていれば良い。

「リミット・ブレイクか：まさか伝説級のそれを成しうるチェンジリングがいて、この目で見ることが出来るとはな……」

様々な思いの籠ったリインの言葉は重い。

チェンジリングはすべからく自分に取り憑いた精霊・妖精との同調率を上げることが第一とする。

同調率が高いほど、取り替えられる部位は増えて行き、それに比例して行使できる精霊・妖精の力も大きくなってゆくからだ。

そして、100%を超える同調率とそれが出来る人間を指して【リミット・ブレイク】と呼ぶ。

【リミット・ブレイク】に到達した者は、全身を交換し、精霊・妖精その物となって彼らの持つ力を十全に発揮できる……といわれているが、アヴァロンのけして短くない歴史を紐解いてみても、そんな同調率をたたき出したチェンジリングの記録はない。

故に伝説か、あるいは御伽噺で語られる存在だった……今までは……今日この場でその常識は打ち砕かれた事になる。

「アレがチェンジリングが目指す場所にして……“到達してはならない”と言われている場所か……」

リインは口の中に溜まったつばを飲んだ。

喉が渴く……緊張しているし、緊張せざるを得ない状況に無意識に力がこもって体を固くする。

【リミット・ブレイク】は確かにチェンジリングの目標であり、最終到達地点だが同時に、そこにたどり着くためには“代償”が必要だといわれている……リインの脳裏に、ほんの短い間ではあったが、共にいた少年の顔がよぎった。

彼は……代償を支払ってしまったのか？

「……」

未だに戦闘が継続しているというのに、ウンディーネはじつとその場に立ち尽くしたまま…自分の体に飛び散った血を拭うでもない。ただそこにたたずんでいるだけだ。

そこにあるだけの蒼の騎士の姿は…周りの自然と一体化するように一つの芸術を作り出していた。

森の深緑に蒼が映える。

「八雲：お前は、”まだ八雲のまま”なのか？」

あまりにも美しすぎる芸術…しかしそこに、人の意思が介在する余地はあるのだろうか？

「ち、ちくしょう…！」

失った左手の痛みに呻きながら、キュールがウンディーネを睨む。痛みは激痛と言っているいい物だったが、おかげで逆上していたキュールの頭が逆に冷えた。

「…待て」

「ひつつー!!」

周囲を見回す事が出来るようになったキュールの目に飛び込んできたのは、逃げ出そうとしている男達の背中だ。

残った右手をのばすと、逃げ遅れた男の一人を捕まえて自分の足元まで引き寄せる。

「何所に行くつもりだ？まだ仕事は終わってないぞ？」

「だ、だって負けたじゃないですか、逃げるが勝ちですよ!!」

「……………」

男の言葉は間違いではない。
左手を切り飛ばされた以上、キュールはもう左手を【長腕のネリ】と取り換える事は出来ない。

文字通りの意味で、キュールの戦闘力は半減している。

だから男の言葉は正しい。

正しいのだが…それを聞いたキュールの目が血走った。

「誰が…負けただと？」

「う…ああ…」

その形相に男が震える。

首を締めあげる右手に、泡を噴き出し始めた。

キュールが鬼の形相のまま前を見れば、彫像のように立っているウンディーネがいる…仕掛ける隙はいくらでもあったはずなのに何もせず、ただそこにいて自分を見ているだけだ。

肩には小鳥まで止まっていて、とてもじゃないが戦闘中の風体では無い…それを見たキュールが切れた。

「なめてんじゃねえぞ糞野郎！！」

「や、やめ…止めてくれ！！嫌だー！！！！」

キュールが、男を腕一本で投げつけた。

悲鳴を上げながら飛んで来る男に気がついた小鳥があわてて飛んでゆくが…ウンディーネはやはり動かず、ただランスを前に向けて構えた。

「くふ！！」

グサリと肉を抉る音と共に、ウンディーネに血の雨が降り注ぎ、蒼の精霊が血の朱に染まった。

ランスに胸を突かれた男は当然即死、絶命した次の瞬間、ウンディーネの右肩が爆ぜた。

「……………」

流石のウンディーネも思わずよろめき、槍に刺さって死んだ男の体が抜けて地面に落ちる。

「くそ、外したか！？」

キュールが忌々しそうに睨んでくる。

ウンディーネの右肩を抉ったのは【長腕のネリー】の爪…この男、またもや部下を囿に使ったのだ…戦意をなくし、逃げ出した人間を無理やり捕まえてまで。

「しかし、かなり具合が悪そうじゃないか？」

ウンディーネの右腕はキュールの言うとおり、肩の三分の二は無残に切断されて千切れかけている。

残りの部分で何とかくっついていてる状態だ。

キュールが片腕をなくして体のバランスが崩れていなかったら、肩ではなく心臓をえぐられていたはずだがしかし、何とか体にくっついていてる状態の右手では、重いランスを振り回す事など出来ないの是一目瞭然、しかも傷口からは白煙が上がっている。

キュールの顔が冷血な蛇のように嘲りで歪む、そろそろ本性が出てきたらしい。

こちらの方が、この男にとって無理がない。

「とっておきの猛毒を叩き込んでやった！そのまま千切れてしまえ！！！」

キュールが言う所の猛毒の効果か…胸の傷は直ぐに修復できたのに肩の傷はなかなかふさがらない。

となると残った左手だけで戦わなければならないが、ウンディーネの左手は、蛇の牙のような【長腕のネリー】の鉤爪に比べて頼りなく、向うには更に毒が付加されている。

一瞬で彼我の戦力が逆転していた。

「……」

圧倒的不利な状況に追い込まれていながら、ウンディーネは反応しない。

喋る気がないのか…それともそもそも喋ることが出来ないのか…あるいは“喋る言葉を失った”のか…その代わり、ウンディーネの答は行動で表された。

キュールを前にしたウンディーネの…その動かない右手のランスが蒼白い光を放ち始めている。

「精霊術を使うつもりか？」

ウンディーネを誰より良く知るリインが真つ先に気がついた。

右手のランス…あれは実は武器ではない…一見槍に見えるその正体はアンテナだ。

精霊と呼ばれ、妖精とは別格として見られる存在であるウンディーネは、他の妖精達にはない幾つかの能力を保持している。

その能力の一つが自然界に対する干渉、ウンディーネがやるうとしていいる物がまさにそれだ。

精霊や妖精が自然界に影響を与えるこの行為を精霊術と言い、ウンディーネの場合は属性の水を操るということになるが、それ自体は珍しい事ではない。

他の水の属性の精霊でも可能だろう。

ある意味で基本と言っても良い能力だが、ウンディーネのそれは他の妖精の追隨を許さないレベルで自然に影響を与える事が出来る。

これはウンディーネだけでなく、他の三つの精霊にも言える事であり、四精霊は精霊術に特化した存在と言う事が出来るのだ。

リインが取り換えを行った場合であっても、荒れ狂う洪水の川の流れを変え、大津波を割ることくらいは容易いほどに、その影響力は絶大なものがあるが、それに加えて今のウンディーネは【リミット・ブレイク】に辿り着いている。

その影響力がどれほどに跳ね上がっているのか、本来のチェンジリングであるリインにも分からない。

「しかし…この場には…」

ただし、強大な力を振るえるウンディーネの能力には制限が存在する。

そもそも自然とはいきなり消えたり現れたりするものではない。そこに在り、あるいは移動する物だ。

故に、ウンディーネの場合は水のない場所ではその力が恐ろしく低下する一面も持っている。

空気中から水分を集める事が出来なくもないが、飲み水にするならともかく、戦闘に使うには到底足らない。

だからこそ、リインは追い詰められても精霊術を使う事が出来なかったし、それを見越してキュールはこの場で仕掛けてきたのだ。

「何をするつもりだ？」

水のないはずの場所で、水の精霊術を行使しようとするウンディーネから、リインは目が離せなくなつた。

「な、何を…何をしようとしている!？」

リインほどウンディーネの事を熟知していないとは言え、キュールも同じチェンジリングであり、【長腕のネリー】もまた水属性の妖精だ。

ウンディーネが何をしようとしているかに気づかないわけがない。「何をしようとしているんだ貴様は!？」

平常心であれば、キュールも鼻で笑うくらいの余裕はあつただろう。

「こんな場所で精霊術が何の役に立つのだ？」と…しかし、既に何度も予想を裏切り、ありえないことを目にした後では冷静に物を見る余裕など残っていない。

「し、ねえええええ!!！」

放たれる凶刃は一直線にウンディーネに向かう。

ずっと不意打ちに徹して来たキュールが、フェイントすら用いず真正面から仕掛けた事が、彼の混乱の度合いを表しているだろう。

本来ならば、ここは一旦退くべきだった。

まだ近くにいてであろうリインを見つけて人質にすると言う手もある。

だが…何をするのか、何が起るのかわからない未知数の恐怖に屈したキュールの思考は安易な行動を選択した。

抜き手に構えた【長腕のネリー】の手が矢のように飛び、石を挟むような音と共に“それ”に突き刺さる。

「な…!？」

返って来た感触と目の前の光景に、キュールの口から驚きの悲鳴が上がった。

ウンディーネがいるのは変わらないが、その姿に変化がある。

無事な左手が掴み、差し出しているのはキュールが不意打ちの為に投擲して、ウンディーネのランスに貫かれて殺された男。物言わぬ軀に手刀が刺さり、そこで止められている。

「ありえない…何をした!？」

【長腕のネリー】の腕は人体を易々と貫く…それは他ならぬ八雲の体で証明され、ウンディーネの装甲ですら貫き、右手を死に体とした事で保証されているはず…なのに、【長腕のネリー】の貫き手は男の体を貫通することなく止められていた。

「あれは…凍っているのか？」

第三者の視点で見ていたラインが一番冷静に、そして一番早く答に行き着いた。

ウンディーネの手にある男の死体に霜が降りている。

今は昼間であり、真冬でも日のある内から霜が降りるわけがない。しかも、あの男はついさっきまで生きていた。

それが何もせず、冷凍されたような状態にいきなり変じるのは明らかにおかしいだろう。

「ウンディーネの…仕業なのだろうな？」

簡単な理科の知識があれば誰にでも分かる事だ。

ウンディーネの司る水は、温度によってその形態を変える事で知られている。

おおよそ0度を下回ったときに固体となるが、これは水を構成する水分子の活動が停滞するからだ。

逆に言えば、分子そのものの結合を促す事が出来れば、常温によ

る固体への変化も可能となる。

そして、人体の殆どは水分を初めとした液体：ウンディーネは、死体の中の水分に干渉し、結合させ、固めて長腕のネリーの攻撃を受け止める盾としたのだ。

氷は、冷やせば冷やすほどに分子の結合が促され、硬度を増す。

水分子を石の様に固めれば、あの一撃を受けることも可能だろう。

「しかし…そんな事が可能なのか？」

理論自体は単純で簡単な物だ。

ラインにもやろうと思えば可能だろうが…問題はその速度、いくら何でも早すぎる。

【長腕のネリー】の攻撃が届くまでの一瞬で、死体を完全に固めてしまえるかと言われれば、ラインの答はNOだ。

「これが、限界を突破した者のポテンシャルか？」

しかし…っと呟いてラインは死んだ名も知らぬ男の死体を見る。

いかに死体とは言え、それを状況の一つ、手段の一つ、道具の一つとして考え、躊躇なく利用する思考は人間のそれだろうか？

しかも八雲は、さっき自分に命は重いと諭した男だ。

その彼と、今ラインが見ているウンディーネの姿が、どうしてもイコールで結ばれない。

「八雲…お主やはり…」

ラインが辛そうに見る先で、ウンディーネが【長腕のネリー】の右手を掴んだ。

「ぐ！離せ！！」

掴まれた腕の装甲を、ウンディーネの左手の爪が貫いて固定している

キュールは痛みに顔をしかめながらも振り払おうとするが、ウンディーネの爪は刺さったまま抜けない。

同じ属性同士ならば、その膂力に大きな差はないが…それだけじゃない…それだけじゃ済まなかった。

「な、何だ？」

自分の身に起こっている違和感にキュールが気づく…熱いのだ。真冬の寒さと言っわけでもないので、体から水蒸気が上がり、全身に熱い汗が滲んでいる…体が真っ赤に発熱していた。

熱中症患者のようにめまいを起こし、おぼろげな思考でキュールは自分の体の変化を考え、理解した瞬間青ざめる。

「お、お前…俺の体内の血液を…」

水分子の動きを停滞する事が出来るのならば、その逆に分子の動きを活発にする事も可能だろう。

人体の水分子が猛烈な勢いで活動した結果として、キュールの体内には熱カロリーが発生し、身の内からキュールを焼いている。

自分の内から発生する物に対しての防御方法など存在しない。

「ぐつつがああ！！離せ、離せえええ！！！」

熱さに耐え切れず、キュールが身をよじるが、右手を拘束されたまま逃げる事さえできない。

左手を切断されていなければ右腕を切り落とす事も出来ただろうが……キュールにはもはや、なす術など残されてはいなかった。

「え、う…げぼ…！」

堪らず吐き出したキュールの吐瀉物は血だった。

地面に落ちたそれが湯気を上げている…キュールの体内温度が何度になっているのか、考えたくもない。

「う…ごぼ…！」

キュールの体が真っ赤になっている。

キュールの体が壊れて行く。

血管が破れ、熱い温度を持つ血を全身から噴き出し、地面に落ちたそれが草木を焼いた。

「あ…あ…お、がは…！」

キュールの体が松明のように燃え上がる。

とうとう限界を超え、体内温度が人体発火を起こすまでに高まったのだろう。

肉の焼ける嫌なにおいが周囲の森に充満する。

「……」

キュールが燃え尽きると、ウンディーネの掴んでいた腕だけが人としての形を保って残っていた。

「…八雲？」

ガサリと草を掻き分け、背後に立ったラインにウンディーネは振り返らない。

「…やはり”代償”を支払ってしまったのか？」

ラインだけでなく、チェンジリングや彼らを良く知る者たちの間には、とある一節の言葉が口伝で受け継がれている。

【汝、心だけは取り替えるなかれ】

この言葉こそが、【リミット・ブレイク】が禁忌とされる理由だ。心の取替えなど、当然だが決して成立しない。

何故ならば、魂は己の肉体に惹かれるものだから…肉体が楔となり、心の交換はチェンジリングが望んでも起きない。

だが…【リミット・ブレイク】は違う。

100%以上の同調率をたたき出し、全身を取り替えた時、両者の境界線は崩壊する。

チェンジリングの魂が戻るべき肉体は逆に”彼ら”の領域に存在し、彼等の体は“我々”の領域に存在する。

チェンジリングの魂は彼等の領域にある肉体に引かれ、彼等の魂は我々の領域に現れた肉体に引かれ…その結果起こるのが魂の交換と言われている。

体が裏返り、魂が裏返り：一人の人間がいなくなり、一体の実体を持った完全な精霊・妖精が現れる。

後戻りが出来なくなるが故の、【リミット・ブレイク限界点超え】：チェンジリングの間では向こう側に行ってしまうことを指して”代償”と呼ぶ。

それは一瞬とはいえ、人の手に余る精霊・妖精の力に手が届いた報いか：それとも当然の代価か？

「だめだ、八雲：戻ってこい！！」

ラインが呼びかける。

希望がないわけではない。

戻ってこれないと言われていても、それが証明された事もまたないのだ。

向こう側に行ってしまったら本当に戻って来られなくなるのか：実体を持った精霊・妖精がどうなるか：そもそもリミット・ブレイクに至ったものが誰もいないのだから調べようがない。

だから：希望はあると信じたい：信じると自分にい聞かせてラインは呼びかける。

「八雲！？戻って来い！！」

二度目の問いかけは強めに：そして願いを込めた。

次々に押し寄せてくる不安に押し潰されてしまいそうになりながらも：それでも口を開き、声を出せたのはラインだからこそだっただろう。

そのせいかどうかはわからないが、ラインの見るウンディーネの背中に変化があった。

視界に映る蒼の背中が大きくなってきている。

ラインに背中を向ける形で：ウンディーネが滑るように近づいてくるのだ。

やがてラインとウンディーネが重なり、一つとなり、蒼の騎士は真の主である少女の中に消えた。

「ウンディーネ……」

ラインは自分の中の欠けていた部分が補完されるのを感じた。

生まれたときから共にあった存在の帰還に、リインは胸に手を当てて安堵のため息をつくとはっとして前を見る。

「八雲？…ウンディーネが戻ってきたと言うことは、八雲はどうなった？」

見れば、やはりそこには背中があった。それは精霊の物ではなく、黒の後姿だ。

「…戻って来たのか…八雲？」

三度の問いかけ…リインは八雲の背中だけを見ていた。

あえて八雲の背中に注視しているのは、周囲の状況が凄惨に過ぎるためだ。

飛び散ったキュール”だった物”の熱で不快に蒸し暑く感じる。それらを直視して、自制できる自信が彼女にはなかった。

煮だつた肉の匂いに、湧き上がってくる吐き気を飲み込みながら…リインは震えていた。

今の自分を見て、笑いたい奴がいれば笑えばいいと思う…それでもリインは心の底から恐怖している…目の前にいるのは果たして何者なのか…八雲か、それと別の物か？

「…八雲？」

様々なものを抱えながら、リインは最後の問いかけと共にその肩に手をかける。

八雲は答えない…まさかと言う思いにリインの心臓が高く早く鼓動を刻み、同時に「やはり、そうなのか」と思う自分がいた。

「え？」

あつさりと抵抗なく、肩にかけた手に引かれるまま振り返った八雲に、リインは面食らい、脱力した八雲が自分の胸の中に倒れこんできて押し倒される。

「あ、痛った！」

二人分の体重と共に倒れこみ、打ち付けた背中に感じる地面の感触でリインは正気に戻る。

「こ、こら八雲！お主な…にを…」

ラインの言葉が尻すばみに消える。

自分の腕に生暖かい温度とぬるりとした感触を持つ物が触れた事に気づいたからだ。

「…え？」

ラインはこの感触とにおいを知っている。

見れば、まだ新しい血が手を濡らしていた。

「ま、まさか…」

ラインは八雲が致命傷に近い傷を負っていた事を思い出す。

そして、キュールとの戦いでは瞬時に回復できないほど深く右肩を抉られ、毒まで受けていたはず…もし、それが完治する前に取替えが解除されていたとしたら？

「お、おい八雲!？」

大声で名前を呼ぶが八雲は反応しない。

ぐったりしていて身動きもしない様は、そのまま死体のようにも見えて、ラインの顔が真っ青になる。

「ちょ、ちよつと待て、このまま死ぬな!!死んでしまうぞ!!」

ラインも焦っているため、言っている事が支離滅裂だ。

今の彼女は八雲の体に押し倒されているため動けない。

本調子なら何の事ないが、彼女もまた毒を受けている上、少ない出血もしているために本調子とは言いがたく、押し除けるだけの力が出せない。

なのに目の前の八雲は血まみれで、何処の傷から出血しているのかも確認しなければわからないという一刻を争う有様だ。

黒の服で隠れているが…布地が重いのは血を吸ったせいだろうか？

まずいと、これ以上は本当に八雲の命にかかると、危機感が刺激されたラインの焦りが加速する。

「八雲!!起きろ八雲!!このままでは本当に死んでしまう…え？」

八雲の体を何とか押しつけようとしたラインの目の前で、八雲の体が淡い光に包まれた。

「これは…取替えの…ウンディーネ?…いや、違う?」

ウンディーネは反応していない、リインの中にいる。

取り替えるべき対象がないのに、八雲に対して取替えが行われようとしているのか？

「あ……」

リインの両手が空を切った。

押し付けていた物：八雲の体が消えた為に、地面に仰向けで倒れたまま空に手を伸ばす形になる。

「や……くも？」

幻のように消えてしまったが：夢ではない証拠に、自分の手に残っている八雲の血はまだ温度をなくしてはいない。

リインは呆然と……立ち上がることも出来ずに突き出した両手の先の蒼空を見上げる事しか出来なかった。

「おつかれ〜」

「はいはい、お疲れさ〜ん〜」

人がまばらになった校舎に少女達の声が良く響く。

昼間は最上の人口密度を誇る学校と言う世界も、日が沈み始めた時間帯になれば一気に人がいなくなる。

むしろ、こんな時間に校舎内にいる人間の方が稀だろう。

並んで歩く二人はどうやらその稀な部類の人間らしい。

学校指定のバック以外に、自前のスポーツバックを持っているところを見ると、部活の帰りのようだ。

「そんで？」

「うん、それからね……あの子が……」

少女達は日常の他愛もない話に笑い、少し拗ねた振りをして話を盛り上げながら笑って歩いている。

「……ん？」

「……あれ？」

二人揃って足を止めた。

背後、しかも直ぐ側で何か物音がしたのだ。

何か落としてしまったたろうかと、後ろを振り返った二人は同時に…日常の中に突然現れた非日常な物があった。

まず…少女達の目が血まみれで倒れている人影を見て…次いでその鼻が血臭をかぎ…耳が苦しげな声を聞き取った。

「き、きゃあああ!!」

「いやああああ!!」

黄昏に染まる校舎に、少女二人の甲高い悲鳴が反響する。

クス…。

どこかで…誰かがこっそり笑ったような気がする。

結（後書き）

謎の声

八雲の夢の中で呼びかけた何者か…あるいは何物か…その目的も存在も今のところ不明なまま。

第一節 蒼の一族

アヴァロンには四精霊を国の象徴とする四つの国家が存在する。

どの国より空に近い場所に存在する【ウィンド】、火山に近い山脈の谷間に存在する【フレイルム】、広大な平原の真ん中に存在する【アース】、そして最も海に近い場所に存在する【アクア】だ。

この四国が頂点となり、その下に小さな属国や領地が傘下に入っているのがアヴァロンの社会形態である。

中でも、アクアの首都である【ウォーター】は壮麗な事で知られ、空中庭園とも呼ばれる【ウィンド】の首都と並んで観光の名所として名高い。

空の【ウィンド】、海の【アクア】と呼ばれ、アヴァロンに生きる者なら死ぬまでに一度、出来れば両方を見てから死にたいと言う者までいる場所だ。

彼の都市の半分は海の上に建設されていて、海水の浸食に耐える石の街中に海水の水路が流れている。

一般家庭の扉を開ければ繋いである小船に乗ってそのまま海に出ることが出来るので、朝食を獲り立ての魚で作るのが当たり前前のだ。

そして当然ながら王城も存在する。

ただし、さすがに王城まで海の上と言うわけではない。

海とは反対側、アクアの陸地側に少しいけば、大きな湖に突き当たり、その中心の島に立っている西洋風の城がアクアの王の在る場所だ。

その風景もまた幻想的で、多くの芸術家のインスピレーションを刺激して筆を走らせ、他の事をつかずにさせる罪作りな城である。同時に、この城はその立地条件から数多の戦術家をも唸らせてきた。

岸から城のある島まではかなりの距離があり、一本の橋が架かっ

ている以外には何も無い。

湖が天然の堀になっているので、攻めるに難しく守るに堅い作りをしている。

四精霊の一つ、水のウンディーネにこれ以上相応しい城もあるまい。

「……」

そんな王城のテラスで、リインは頼杖について湖面を見ていた。

あの襲撃事件から既に一週間、今の彼女の姿は当然ドレス姿ではない……とはいえ、彼女の今の格好が正しいかどうかと言うのもまた疑問だ。

仕立ての確かな白のシャツに、動きやすさ重視のスボン、そして長い髪は邪魔にならないようにポニーテールでまとめ、化粧っ気のないすっぴんの顔……まあ、顔に関しては若さの特権で化粧がないほうが良いのだが……そして愛用の剣をテーブルに立てかけているとくればどう見ても剣士のそれであって王女の装いではあるまい。

何も知らない女性などは、うっとりで見入りかねない中性的な光景だが……胸部で自己主張しているふくらみが彼女の性別を断定している。

「……はあ」

そんな彼女は最近、こんな調子で溜息をつきながら外を見ている事が多い、明らかに心ここにあらずだ。

日の光が反射している水面の光景など、実に美しい物だが、それすら彼女の憂いを晴らすには至らないらしい。

そして、主の憂鬱のとはちちりを食らっているのは側に控えている給仕役のメイド、リインと同じくらいの歳に見える茶髪に焦げ茶色の目をした少女は、物憂げな主にどういう対応をしいいか困っていた。

気軽に声をかけるのは不躰に思えるし……すぐ隣に控えているランドは黙って突っ立っているだけで助け舟にはならない。

結果、彼女はかれこれ結構な時間、リインのそばで立ち尽くして

いる。

「お姉さま？」

「ん？ルインか？」

背後からの声に、ルインが振り向くと、そこにはもう一人の彼女がいた。

もちろん本人では無いし、鏡でもない。

そこにいたのはルインとそっくりでありながら正反対に、これぞ王女と言うべき姿の少女だ。

飾り気は少ないが清楚なドレスに、控え目だがセンスのいいピアスなどの装飾品をつけ、微笑んでいる姿は万人が思い描く王女のそれだろう。

姉と言っていたことから分かる通り、ルインと呼ばれた彼女はルインの妹である。

良く似た二人だが、ルインがその蒼い髪を長く腰まで伸ばしているのに対して、ルインの方は肩のあたりまでの長さに切りそろえているのが両者を見分ける基準になりそうだ。

「メイド達が心配していますよ？粗相をして姉さまの機嫌が悪いのではないかと」

「む？」

ルインはやつとそばにいる少女と、控えていた護衛やメイド達が身を竦めている様子に気がつく…みんな心配そうな顔をしているのに気づいてちよつと焦った。

「す、すまない、気がつかなかった」

「王族の人間の行動は何であれ下の者に影響を与えますから…」
気をつけてくださいねと朗らかに軽く、妹にたしなめられたルインが苦笑する。

「ここはいいですわ、ご苦労様でした」

「は、はい。では失礼します」

姉妹は揃って、そそくさと去ってゆくメイド少女の後姿を見送る。

「…見ない娘ですわね？」

「ああ、最近入ったんだ。名前はキミ、よく働いてくれている」

「ふ〜ん、クレアはどうしたんですの？」

常につき従っているはずのメイド長の名前を出した瞬間、リインが音がしそうな勢いで顔をそらした…姉のそんな行動に、何かあったなと妹が察するのは容易い。

「クレアは…引き籠もった」

「…は？」

意味が理解できずにリインが首をかしげる。

「その…例のドレスがな…」

「ああ、あの出かける時には新品だったのに、帰ってきた時には布切れになっていたアレですわね？」

ある意味で、最も被害者なドレスだ。

「それだ。実はあのドレスな…クレアがデザインして細かく注文を付けた会心の一品だったらしくて…」

事情を理解したリインも微妙な顔になる。

「…ふむ。それで、何をお悩みなのです？」

リインは空気を読んで話を関係ない方向に向けた。

これ以上は地雷になりかねないと悟ったのだろう。

妹の気遣いに、リインもホツとしている。

「お前には敵わないな」

リインが対面の席に座るのを見て、リインが苦笑する。

王族と言うのは面倒な物で、悩みがあっても誰彼構わず相談も出来ない人種だ。

リインが気にしなくても、相手のほうが恐縮してしまって話しにならない事も多い。

だからリインが名乗りを上げてくれたのだろう…そんな妹の思いやりが素直にありがたかった。

「まさか、殿方の事を考えてらっしゃるのでは？」

「つつ！？」

いきなり直球で来られ、リインがぎくりと来た。

この一週間、ラインの思いを占めていたのは八雲に関する事だったのだから…。

「え〜っとな、おや？」

何時の間にかビシリと、空間がそのまま凝固したような空気に気がついたラインが素に戻る。

そして思う…何故、ラインはあり得ない物を見た目で自分を見ているのだろうか？と…見れば聞き耳を立てていたメイド達もラインに倣ったように固まっているし、兵士は直立不動のまままで石になっていた。

「そ、その本気反応…そんな…」

口を手で隠して椅子を倒しながら立ち上がる妹…しかも姉を指さしている。

相手が血のつながつた姉妹とはいえ、誰かを指さすなどはしたないだろう…確か自分の行動に気をつけると言ったのはラインだったはずだが？

「あ、あの姉さまが！！剣を振るのが食事より大好きなお姉さまが！！肉体労働専門のお姉さまが！！」

「いきなりだな、腹黒妹？お前、妾のことをそんな風に思っていたのか？」

妹を見る姉の目は何処までも冷ややかだ。

ラインは権謀術数に関しては自分以上だと他ならぬ本人達が認められている…なのにな。

そんな妹が何時もかぶっている猫を驚きで引き裂いて本性をさらしていた…しかも人目のある場所で…せつかく作ったイメージが崩れるだろうに…。

「全然女らしくないのに胸だけすすくと育ちやがるお姉さまがー！？」

ぶつちやけて本音丸出しの妹に、いい加減ラインの額に怒りマークが浮かんだ。

ラインとラインの姉妹を見分ける方法は髪の長さのほかのもう一

つ存在する。

二人を並んで立たせれば一目瞭然…それが明確に分かる為に、ルインは絶対リインと並んで立ちたがらない。

それが何かと聞かれたら胸の厚みというか、トップとアンダーの差というか…要するに、二人は原材料は同じはずで、見た目もそっくりなのだが、一部分に関してだけは明確に格差が存在しているということだ。

ちなみにそれを言うとルインが泣くので、彼女の前では貧しいとか乳とかいう言葉は禁止ワードに指定されている。

「お、お姉さまに春が来た〜！！」

視界の隅でメイド達が奇声を上げつつ万歳しながら泣いているのがちよつとむかつく。

自分に浮いた話が立つのがそんなに驚きだろうか？

いや、確かに16なのに婚約者の一人もいないのはちよつと問題かなと自分でも思うが、それに関してはリインのせいだけではないはずだ。

「…と言うより声が大きいぞ、アレでは城中に聞こえたんじゃないか？」

「さて、では詳しい事をお聞きしたいですわ〜 お姉さまの良い人はどんな人ですか？」

「相変わらず豹変と言つのがふさわしい切り替えようだな、話を聞く気はないのか妹よ？」

思いつきり姉の言葉を無視した妹が、目をやたらとキラキラさせている。

しかも、ルインはチェンジリングではなかったはずだが…何故だろう？

本人の耳に重なるように、団扇のように大きな動物の耳が見える気がする……なんか動かしたら空も飛べそうな奴だ。

チラッと周りを見れば他の連中にも同じ耳の幻影が見える…何時の間にこんなわけのわからない妖精が大量発生したのだろうか？

「さあさあさあさあ、きりきり吐きやがるが良いのですわ!」
詰め寄ってくるルインの目が激しくやばい…こういう話に目がない娘なのだ。

腹黒なくせに、根っこはとんでもなく純情で部屋には恋愛小説が山となっている。

一番厄介なのはその行動力、文字通り思い至ったら吉日、決めてしまえば後は姉である自分より早く動く、そしてしつこい…彼女も別の意味で王女らしくない一面を持っているが…親愛なるお父様は娘の育て方を間違ったのではないでしょうか？

…その父に自分も育てられたのだから、娘としての心境は複雑だ。
「あー別に良い人と言うわけではない。先日の襲撃のときにな、命を救われた相手だ。窮地の時、寸前で駆けつけてくれてな」
「ほうほう」

周囲から音が消えた。

リインが襲われた事を知らない人間はいない。

全員が自分の言葉に聞き耳を立てているのを感じるが…その気配が明らかに見えている連中の数より多く感じるのは何故だろうか？
ゴクリと喉を鳴らす音で話の続きを促して来る奴までいる。

「それで、どうしたんですか？」

「それでって…」

テーブルの向うから身を乗り出して来る妹が怖い。

顔が自分と同じなので、こんな風に興奮した姿を他人から見られたいやだなーとリインは思う。

これはもう、それだけだったで話を締める事は出来まい。

「そのまま敵を問答無用で殴り倒し、私を抱き上げて逃げてくれた」
実際は成り行きと言おうか、死にたくないとか情けない事を言っていたが…そこは端折ってもいいだろう。

ルインでなくとも、そんな期待を裏切り、夢をぶち壊す様な事は誰も望むまい。

「その後色々…ああ、逃げるとか困になるとかそんな事を話した

気がするな……」

言ったのは八雲ではなく自分のほうからだだったが、大差は無かるうと思う。

結局は八雲に実力行使込みで却下されてしまったし……これと言って押しに弱かったつもりはないのだが、八雲の持つ訳の分からない強引さに流されてしまったのは自分でも少し意外だ。

「え〜っと、その後だな？ 私達は不覚にも敵に追いつかれ、奴は重傷をおってしまった。力なく倒れてくる奴の体の重みを今も覚えてる」

あの時は絶対死んだと思った。

八雲の仇討ちを……考えなかったと言えば嘘になる……それほどの重傷だったのだ。

今思えば、逃げられないならせめて一太刀と言う思いもあったかもしれないなど……そこまで考えて言葉を切った……さて、この先はどう説明すれば良いだろう？

話せないことも多い……と言うより話せない事だらけだ。

そもそも、こういった腹芸は自分よりルインの担当なのだが……。

「うむ、あの男はぼろぼろなのに立ち上がったってくれたよ。立ち上がって、私を狙ってきた物たちを蹴散らし、守ってくれたのだ」

嘘は言っていない。

ただ途中の重要な部分を大幅に、しかも意図的に言わなかっただけだ。

八雲に守る気があったかどうかすらも確認していないが、守られたのは事実だし、そう考えても悪くはないだろう。

どちらかと言えば守る側の回数の方が極端に多いリインだが、そう言う乙女的な要素に憧れたって罪はあるまい……守られなければならぬほどか弱いかと聞かれたら、自分を含めて否と言う答が帰ってくるだろうが。

「……………うわー！……！！」「……………」

「な……」

周囲から上がった歓声に驚き、リインは少々はしたない声を出してしまった。

「イエスイエスイエス！！」

しかし、目の前のリイン程ではないだろう。

実に男らしく拳を握って腰の辺りでスイングさせている…女で王女だったはずだが？

「なんて主人公タイミングの登場！なんてヒロインなお姉さま！これです！！この劇的な展開こそ私が欲しかったものなんです！！」

妹の言っていることが理解できないのは、自分が男勝りなせいかな…歳は確かひとつしか違わないはずだけどな…などと退きながら考えていると、リインが瞬間移動のような速さでテーブルを回り込み目の前に移動して来た。

「お姉さま！！」

「うあ！！」

思わず剣に手がかかったが、寸前で何とか抜刀するのはこらえる事が出来た。

額と額がくつつきそうになるほどに近い位置に妹の顔がある。

普段は優雅におっとり動く文系人間のくせして、条件がそろえば時々運動系の自分すら凌駕する動きを見せるからこの妹には油断できないのだ。

「っていうか！何で私じゃなくてお姉さまにステキングなイベントが発生するんですか！？」

「あのな…」

それならお前はドレスで森を全力疾走したり、森の妖精よろしく半裸になった上に血まみれになったり、脇腹を爪でこっそり持っていかれそうになりたいというのか？と言いたいのを我慢した…妹も本気で言っているわけではないだろう。

言っているわけじゃないと信じたい…まさか、暴走しているからそこまで考えが回らないのか？

「ずるいです！！男の人に興味のないお姉さまにそんなイベントが

あつても無意味じゃないですか!！」

「人を特殊な趣味の持ち主のように言うな、姉に向かつてなんて事を言う?それにお前が思うようなロマンティックな事は全然なかった」

「本当ですか?」

「疑い深いな、好きで押し倒されるわけないだろう?」

ピタリと空気が止まった。

「あ」

目の前で劇画調に固まっているルインを見て、はっと気づいてからヤバイと理解した。

ルインはただ単に、気を失った八雲にのしかかられた事を言いたかっただけなのだが、今の言い方ではとんでもない勘違いをされると、弁明しようとしたが、既に遅い。

「そんな…無理矢理で強制的にお姉さまが大人の階段を駆け上がりされるなんて!！」

「……………なに!?!」「……………」

城のあちこちから完全武装の兵士が殺到してきた。

全員が肩で息をしているのは何が理由だろう?…ギラギラとした殺気まで放出している奴まで混じっている。

「さて、姉さま?そのとんでもないマネをした下種やるうは何処のどいつですか?」

にっこりと笑うルインの言葉に合わせ、兵士達が手持ちの武器で地面を叩く。

聞いた瞬間にルインを筆頭とした即席の抹殺部隊が、八雲をぶつ殺すために飛び出して行きそうで、ルインは冷や汗をかくしかない。「騒がしいな?」

ピタリと、一言で騒いでいた全員が動きを止めた。

救いと言うには微妙な…第三の人物がこの場に現われたせいであり、誰もがその人物を知るが故の反応だ。

「これはこれはガンツ伯父様、はしたない所をお見せしました」

さつきまでののは一体なんだったのか、一瞬で猫をかぶりなおしたルインは作法に則った優雅な所作で、声の主…ガンツと呼ばれた男に挨拶をする。

ルインにルインと数秒前までは殺気すら纏っていた兵士達も、倣うように臣下の礼を取った

「…フン」

髪の色はリインやルインと同じ澄んだ蒼、目の色や形など、明らかにリイン達と血のつながりを感じさせる容姿をしていた…それも当然だろう。

男のフルネームはガンツ・アクア、先代のアクア国王の第一子にして、現在王位継承権を持つ者の一人でもある。

そして、リインとルインの母親は先王の第二子だった。

要は二人の母がガンツの妹だったわけで、ルインが伯父と呼んだ通り、この三人は伯父と姪の関係にある…多少なりとも似ていなければそっちの方がおかしいだろう。

つまり彼は所謂…王太子とか王子とか呼ばれるべき人間なのだが、プリンスに妙な幻想を見ている人間は中年らしく腹の出てきた体型、薄くなった頭頂部、皺が出てたるみ始めた顔…どう見てもおっさんである彼に幻想が破壊されるかもしれない…王子だろうが貴公子だろうが歳は取るのだ。

しかもいつもイライラしているので、人相が悪いのが基本になっているため、どっちかという悪代官といった風体である。

「先ほどから不穏当な言葉が聞こえている気がするが？」

「皆の勘違いです。とはいえ、原因は勘違いさせてしまった私の言葉にあります。申し訳ありません」

「そうですね、ガンツ“王代理”が気になさるほどの事もない瑣末事です」

穩便に収めようとしたリインの努力を、ルインが粉々に破壊してくれた。

しかも火種にダイナマイトを放り込むような挑発である。

妹が絶対狙ってやっている事を知っているリインは、怒りに歪むガンツに心の中だけでため息をつくしかない。

「……くっ」

何か言おうと口を開いたガンツだが、結局何一つ言葉にはならず…その代わりとばかりにリインを一瞬激しい目で睨み、次いで見下しの目で見ってくる。

「やはり若い女子と言う事かな？この国を背負って立つ日は近いというのに、アクアの未来が心配でならんよ」

「未熟者ゆえ、真摯に拝聴させていただきます」

ガンツの嫌味を、リインは感謝の言葉で流した。

二人の間に漂う険悪な空気はどこまでも一方通行に素通りして消えてゆく。

「…チツ」

本人は聞こえないようにやったつもりだろうが、地声の大きさを把握していないのだろうか？…離れた所にいるメイドや兵士ならともかく、側にいたリインとルインには舌打ちの音が丸聞こえだ。

「フン、不敬とは判っているが、ウンディーネは何故お前を選んだのか…“精霊と話が出来ない”事が残念でならんよ」

ガンツがきびすを返すと、人垣が割れて道になる。

人間によって作られた道を、ガンツは悠然と歩いて去って行った。

その姿はまあ…王族として一応の風格を醸し出していたように見える。

それに焦ったのは兵士とメイド達だ。

ガンツの去った方とリイン達を交互に見ておろしているの、リインから助け舟を出すことにした。

「さあ、皆仕事に戻って欲しい。遊びは終わりだ」

その言葉にほっとして、解散になった。

テラスに残ったのはリインにルインとランドだけだ。

「ランド、申し訳ないですけど、姉様と二人つきりでゆっくりお話しがしたいんですの」

「は、承知しました」

ずつとそばにいたランドも、ルインにそう言われて二人の事が見えるが話は聞こえない位置にまで下がる。

あの場所が護衛として離れられる限界という事だろうか？先日のリイン襲撃以来、生真面目さに拍車がかかったかもしれない。

リインとルインはランドの忠臣ぶりに苦笑しながら、元の様に椅子に座りなおして向き合う。

「やれやれ…最近敵意を隠さなくなってきたな、伯父上は」

「【継承】の日が近いから一際いらついているのでしょう。本当に面倒、頭に血を上らせすぎて血管を切つてしまえば良いのに、あの禿…」

自分の対面で嫌そうな顔をしている妹を…また黒いことを言っているな…と思いつつリインは見る。

二人の会話が聞こえる位置に誰もいないのをいい事に、言いたい放題だ

「……………どう思う？」

「七割といった所でしようか？動機は十分ですし、容疑者のトップは間違いなく伯父上でしょう。姉さま嫌われていますから」

「動機か…動機ね…」

他国の前に、自分の国の人間…それも現在トップの人間を疑わなければならぬのは心情的に色々あるが、残念な事にガンツには“未来の国王”を暗殺しよう等と考える動機がなくもないのだ。

「16年も前の話だぞ？それに妾のせいではないと思うのだが？それで嫌われてもどうしようもない、あえて言うのならウンディーネのせいだ」

「精霊に直談判なんて出来ませんし、”自称”被害者にそんな事は関係ないのですよ。彼らが求めている物は自分が失った物の返還、補償…姉さまがどうであれ、伯父上はその辺りに関してはしつこうですから、判り易い小物の悪人の図ですわね」

流石に辛口すぎるのではあるまいか？

「…一応、我々の血縁者だぞ？」

「それが何か？少なくとも私は認めていませんわ」

「いや、認めるとかそういうことでは…」

「加害者に”なってしまうた”姉さまはご愁傷様です」

「だから、そこは楽しそうに言う所ではないだろう？」

何故この妹は、何故そこでワクワクと楽しそうに笑えるのだろうか？

「はあ…まあいい。そのことはとりあえず置いておくとして、残り三割は？」

「証拠がありません。あれば今頃、伯父上は生きてはいませんよ」

証拠さえあれば即殺だったらしい…そしてこいつはそう言う事に對して躊躇するほど殊勝でもない。

敵は殲滅するタイプの人間だ。

「真犯人に通じる系の一本でも残っていたら…悔しいですわ」

「私は今のおまえを見て不覚にもほっとしたよ」

先日のリイン襲撃において、ランドはリインの命を完全な形で果たした。

捕らえた二人を残し、残りの連中は生きて帰さなかったのだ。

そして、いざ生き残りの二人を尋問して見れば、襲ってきた連中は真正正銘の傭兵で、調べるまでもなくわかる程度には名の売れた傭兵団だった事が判明した。

「結果としてですけど姉様は傭兵団が一つ壊滅させた事になります。箔がついてよかったですわね」

「知った事か」

リインは博愛主義者ではない。

連中は自分をとらえ、それが出来なければ殺すつもりだったのだ。返り討ちになったのは自業自得だ…それに報酬がどれほどだったかは知らないがリインを攫ってこいなどと言う依頼を請け負うような奴らに同情の余地などない。

その程度も知れるというもの…案の定、傭兵団の噂もろくな物で

はなかったもので、案外良い事をしたかもしれないとすら思う…唯一の誤算と言うか残念な点は、捕らえた二人がそれ以上の事、つまり襲撃の依頼人の事を知らなかったという事だ。

その二人だからというわけではなく、傭兵団の誰も直接依頼人に接触していなかったらしい。

まず、依頼人からリインを攫ってくる依頼を受けたキユールが、金をチラつかせて傭兵団に依頼したという二重契約という形をとっていたと言うのだ。

「周到と言うか…」

キユールが生き残っていれば依頼主の特定も不可能ではなかったのかもしれないが、あの時点でリインに出来ることは何もなく、奴を生かして捕らえるのはリスクが高すぎた。

この結果は必然として受け入れるしかないだろう。

全てを望むような贅沢は理想ではない。

「逆を言えばそれだけ、依頼人は正体を隠したかったと言うわけですわ、あら？ そう言えばガンツ伯父上が依頼をするなら、当然自分が指示したと言う事は隠したいはずですわよね？ なんせ姪の誘拐を指示した事になるんですから」

「仮にだ…伯父上が影でこそそそやっていたとしても、何故今なのだ？」

「ですから、姉さまの【継承】が近いからでしょう？」

「リイン？ 知っているだろうが、【継承】は儀式と銘打ってはいるが、単なる祭りだ」

アクアだけではない。

四国は精霊を頂点に置き、象徴として置くことから共通の法律、風習、祭典が存在する。

【継承】もまた、その一つである。

内容は精霊のチェンジリングが代替わりしたとき、新たなチェンジリングの存在を国民に示すため…この場合はリインが国民の目の前でウンディーネを呼び出し、取替えを行うというただそれだけ

の…要するに国民に自分がチェンジリングである事を示すセレモニー、その後は飲めや歌えの大騒ぎに突入するので、リインの言うとおり儀式と言うより祭りの印象が強い。

「お姉さまこそご理解なさっておられるはずです。【継承】は姉さまが未来のアクア王となられるために避けて通れる物ではないと」「う…」

ガンツは王ではない、あくまで王代理である。

先代の王が亡くなった時点で長子であるガンツが何故、アクアの王とならずに王代理と呼ばれているのかと言うと…これもまた精霊を保有する国の慣習にその原因がある。

ガンツはその条件に当てはまらなかった…いや、選ばれなかったのだ。

故に、現在の王位継承権の第一位はリインにあり、いずれリインはガンツから王としての権限を返還されることによって、王女から女王となることが決まっている。

【継承】の儀式は次期王であることを示す第一歩なのだ。

「そもそも、姉さまはとつくの昔にウンディーネとの取替えに成功していらつしゃった。それを公開するには時期尚早と先延ばしにしていたのは誰ですか？」

…ガンツである。

「おかげで、継承を行うまでもなくこの国でリイン姉さまがウンディーネのチェンジリングだと言う事を知らないものはいませんよ？」
いい加減にしると周りの重鎮にせかさねなければ、まだ先延ばしにしていたかもしれない。

王代理の持つ力は重鎮達より上だが、彼ら全員の総意を跳ね除けるほどではない…ここまで露骨だとむしろ笑えるというものだ。

「皆知っているなら省いてもいいんじゃないかと思うんだがどうだろっ？」

「これも伝統でしきたりです。本当なら自分がやるはずだった継承の儀式を舞台袖で見る気分はいかがな物でしょうかね？」

「…ルイン？そこは良い気味だというニュアンスでいうのは正しいのか？」

気苦労が多い気がするのは長女だからだろうか？と世知辛い思いがリインの頭を掠める。

そんな姉の思いを見抜いているのだろうルインは、逆にニコニコと満面の笑みだ。

「……なんだかんだ言っても、アクアを長い間運営してきたのは伯父上だ。それは事実として認めなくてはならないだろう？」

「周りの人たちにも助けられているようでしたが、まあ王が全てをやらなければならぬわけではないですから認めても良いでしょう」

「棘がある言い方をする」

「私、伯父上の事が嫌いですから」

真顔で言うとは…本当に容赦がない。

冗談でも何でもなく、これは心底毛嫌いしている反応だ。

「姉さまを嫌っている人間を好きになるわけがないでしょう？」

「……」

姉として妹に慕われる事に悪い気がするわけがないが…こいつはちよつとリイン至上主義な所があつて時々こんな風に暴走する…何でこんなに盲目的に慕われるようになったのだろうか？

「お優しい姉さまは、王になつても伯父上に国の運営に参加してほしいとお考えになつているのかも知れませんが、多分無理だと思いますよ。確かに四国の歴史には象徴としてのみ存在して、政に関わらなかつた王もいます…」

でも…とルインは続ける。

「伯父上はダメです。襲撃の件に関係あるなしに関わらず、あの人は小心者で、器に見合わない野心家です。国の実権を保障してもそれで満足はしないでしょう」

「……」

確信を持った断定、まるでその蒼い瞳ですべてを見通しているかのようだ。

特に見通せなくてもガンツが過去を引きずっているのは、彼のリンに対する刺々しい態度で明らかなのだが…。

「どんなに頑張った所で、伯父上の本当に欲しい物は手に入りません。だからあの人は決して満たされないのです」

「…ウンディーネ？」

そう…リンが襲われたのも、ガンツに敵視されるのも、突き詰めればその元凶はウンディーネにあると言っていい。

頷いたリンは、ただ静かにリンを見ているだけだが…その瞳に宿る冷たさに、同性で姉妹のリンも思わず背筋がゾクリとした。「姉さま、勘違いなさらないでくださいね。私はこの国がどうなるうと知ったことじゃありません」

王女の言葉としては問題だ。

誰かに聞かれたら面倒な事になったかもしれないが、この妹に限ってその心配は杞憂だろう。

この妹は絶対周りに誰もいない事を計算に入れたうえでしゃべっているはずだ。

「私は父と母と妹と…姉さまが幸せならそれ以外の人間なんて本当はどうでもいいんですの、そして私の大事な物を奪おうとする人は誰であろうと…」

その先の言葉の代わりに、リンは今日一番の極上の笑みを浮かべた…その意味する所がどこにあるのかは怖くて聞けない。

「姉さまが死ぬくらいなら、私が伯父上を亡き者にしますわ」

「…伯父上はあくまで容疑者の一人なのだからな？」

「ええ、判っていますわ。“今の時点で”のお話ですわよね？」

クスクスと腹黒く笑う妹に呆れながら、心配する人間を間違えているのかもしれないとリンは思う。

伯父が犯人かそうでないかはまだわからないが、本当に危険なのは目の前の妹ではないか？

「伯父上の為にもご自愛くださいお姉さま」

何で自分を敵視している伯父の命を人質にされなきゃならないの

か分からないが、これで何が何でも暗殺されるわけには行かなくな
った。

ガンツはともかく、自分と言うストッパーがなくなった時、この
妹が何処に向かって暴走するか予想も出来ない。

あるいはリインに注意を促すため、プレッシャーをかけてきてい
るのだろうか？

「…リイン？ 博学なお前に一つ尋ねたいことがある」

どうにも気まずい方向に流れる空気をどうにかしたくて、ふと思
い立ったリインが話を振る。

ガンツの事は無視出来ないが、もう一つの問題も同じかそれ以上
に無視できない。

「なんでしよう？」

「生きている人間から精霊や妖精が離れる事はあるのか？」

「ありません」

清々しいまでの即答だった。

「精霊と妖精は本質的には同じ物です。区別しているのは我々人間の
基準です。そして妖精も精霊も取り憑いた人間の魂と融合してい
るとというのが定説ですね…双子の片方がチェンジングで、死後妖
精が残った方に取り憑いたという話は聞いた事があります」

リインの話はリインの意図と微妙にずれているが、これは正しく
説明してない事が原因の弊害なので仕方がない。

唯一、ありえないものを見たランドには絶対口外無用をあらゆる
方法で誓わせたので、いくら口の軽い男でもランドから事情が洩れ
る事はないだろう。

ランドもまた、全てを知っているわけでは無いし…全てを知るの
は唯一リインだけだ。

「…もし、生きたまま何かの方法で精霊や妖精を引き剥がされたら
？」

「そのチェンジングは死ぬでしょうね、魂を二つに引き裂くよう
なものですから」

「……」

「どうなさったのですか？こんな事は私よりも“生まれた時から”チンジリングだった姉さまの方が詳しいはずでしょう？まさかチンジリングを伯父上に譲りたいのですか？」

「いや、それはない。…ちよつと確認したかったただだよ」

そう言うが、ラインの気は晴れなかった。

ルインにそんなつもりがないのはわかるが、ここにいる自分は死んでなきゃおかしいと断言されるのは結構ショックだ。

ただし、ルインには何故自分が生きているかの見当もおぼろげながら知っている…本当の不可思議は一つだけ…一人だけ…遠野八雲…文字通りの意味で姿を消した彼は、今頃何処にいるのだろうか？

「……」

ルインはなんとなく海を見た。

城の一番高いテラスであるここからなら、水平線が良く見えるが…八雲のいる場所はこの水平線の先に存在するのだろうか？…それとももつと遠いところか？

彼が消えるのを見たのは他ならぬ自分の目だ。

その重さが消えるのを感じたのは自分の腕だ。

あの少年は…死に体の状態でありながらあるべき場所に戻って行ったのだろうか？…生きているのなら礼の一つもしたいが、あのまま死んでいてもおかしくはない。

それにもし生きていたとして、再び目の前に現れたとしたらリインは……。

「お、乙女ですわ……」

「は？」

不穏な事を言われて振り向けば、何故かルインが尊敬と言うか羨望の眼差しを向けてきている。

それを真正面から直視してしまったリインは、思わずうっとして退いた。

「その姿はまさに愛しい人を思う祈りの乙女の姿！」

「え？」

「お姉さま！お姉さまは、自分に乱暴した殿方のことを思っていたのでは！？」

「あ、まあ否定はしないが……」

八雲の事を考えていたのは本当だ。

乱暴した相手というのは間違いだが、有無を言わせぬ迫力に負けて声が出ない。

八雲の名誉には心の中だけで謝っておく。

「なんてけなげな姉さま！！自分を襲った屑野郎のことをそこまで献身的に思うだなんて！！」

いつの間にか、八雲が命の恩人から強姦魔になっている。

ルインの頭の中では、どう言うルートを通してそう言う結論に至ったのだろうか？

「あのな……」

「では姉様！？」

「うわ！」

こいつ何か勘違いして暴走していると思って反論しようとしたが、カウンターでにじり寄られて肩を掴まれた。

興奮したルインの様子に圧倒され、反論の言葉が潰される。

「姉さまに乱暴した害虫野郎はいずこに？」

「何でそんな事を聞く？と言うより王女としてその言葉遣いはどうなんだ？」

「それはもう、そのド腐れを調教して差し上げて姉さましか見る事が出来ないようにしてやるためですわ、ご安心ください。私、そっち方面の知識も豊富ですよ！！」

天使の笑みで鬼畜な事を言う妹に、ルインはにっこり笑って鞘に入ったままのロングソードを彼女の脳天に落とした。

「…つまり君は、授業が面倒で抜け出した後、適当に時間を潰そうとして校舎をさまよっていたら、学校に侵入した野犬に襲われたという事かな？」

「そうです」

ベッドの横、パイプ椅子に座った二人の人物：歳の行った定年間際っぽいベテランと、30位の若くて熱血っぽい青年の質問に八雲は躊躇なくイエスと答えた。

この二人は要するに、刑事と呼ばれる仕事につく人間だ。

「本当なのかい？なんか…話しづらい事とかあるのかな？」

若い方の…確か青島と名乗った刑事が続けて聞いて来た。

当然刑事としての質問だろう。

この程度の嘘に騙されるようなら今すぐに辞表を書くべきだ。

同時に本気で気遣ってくれるのも感じるので、どうにも八雲の良心が痛い痛い。

「おいおい青島？このあたりにしとこうや」

「和久さん」

年配の方、和久と名乗った刑事が青島刑事を止めた。

「この子の怪我は”ひどくなかった”が、血が足んなくて昨日までずっと寝ていたんだ。話を聞くにも間を置いた方がいいんじゃないかねえのか？」

「あ、そうっすね…ごめん」

「い、いえ」

言われて青島刑事は頭を下げてきた。

内心で断定する…彼は良い人で間違いなし、彼だけじゃなく和久刑事も良い人だ。

きっとドラマなら名コンビだろうとそんな事を考えていると、病室の扉がノックされる。

三対の目が扉に集まり、どうぞと答えれば扉が開いた。

「…失礼します」

八雲とそう変わらないくらいの歳だろう、紫がかって見える髪を

両サイドで団子にした少女が、果物を入れたバスケットを持って入って来た。

制服を着ているところを見るとクラスメイトのお見舞いだろうか？ やや前かがみになっているため、顔半分が隠れてしまっているが見えている顔の輪郭や唇の形で美人であろうというのには容易に知れる。のだが、それを見た八雲の表情がこわばる。

八雲の表情を言葉にするなら「やべー！！」と読み取れる感じだ。

幸か不幸か、少女に注目している刑事達はそれに気が付かない。

「おっと、彼女が見舞いに来たようじゃないか、邪魔者は退散するでしょうや」

「そうっすね、あ…八雲君？これ俺の名刺、何か思い出したら何時でも連絡入れて、待ってるから」

言っつや否や、二人は空気を察する感じに病室を出て行く。

青島刑事の名刺の出し方が手慣れているのが少し気になったが、後にはベッドで身を起こしている八雲と女生徒が残り…二人の見える前で扉がゆっくりと閉じる。

「……それで、何か用？」

割と疲れた感じに問いかければ、それを聞いた女生徒が八雲を振り返る。

その動きは機敏で、先ほどまでのおどおどした様子は微塵もない。前髪に隠れていた目がはつきりとベッドの上の八雲を見る。

猫のようにパツチリとした目だが、喜悦を浮かべる藍色の瞳に八雲がゾクリと来た。

それは、捕食者に被捕食者が抱く寒気だろうと自己分析する…相手は八雲にとってどうにも頭の上がない人間なのだから、当然と言えば当然だろうか？

八雲の見ている前で、ニヤリと笑った彼女の口の端から可愛い八重歯が覗いている。

「ニーハオ八雲オ、チョトお姉さんとワクワクドキドキトーキン

グするヨロシ！」

彼女は自分の持ってきた果物がごに手を入れると、適当に選んだリンゴを取り出し、皮も剥かずに豪快にかじりつく。

女生徒用の制服の胸元には【3 - A 龍 鳳】と刺繍された名札が縫い付けられていた。

第一節 蒼の一族（後書き）

リン・アクア

アクアの王位継承者でやがて遠くない内に王として即位する事が確定している一六歳の少女であり、それを受け入れている。

四精霊の一つ、ウンディーネのチェンジリング。

先代ウンディーネのチェンジリングだった先王の孫娘に当たる三姉妹の長女。

妹の手綱引きとかやがて国を司る責務とか、一六歳にしては苦労症とある希少なケースの体現者であり、”生まれた時から”チェンジリングであった。

そのおかげで実の伯父からは疎まれたりしている。

第二節 傾国的美少女来襲

「さて、最初に聞いてオキたい事がアルヨ」

いきなりの来訪者：龍鳳は、そんな風にイントネーションのずれた訛りのある日本語で話の口火を切った。

対する八雲の反応は半眼：それを見れば彼女が招かれざる客だというのがよく分かる。

「日本では病院で目を覚ましたらまず天井を見て「知らない天井だ」と言わなければならぬと聞いたが、何でネ？」

「それは人型決戦兵器のお約束」

「二回目は「またこの天井か…」と変化するらしいのダガ？」

「何回俺を入院させたいんだ？サブカルチャーの知識を詰め込みすぎだろ！？」

思わず突っ込みでカウンターを入れてしまった。

病室の壁より白い物が、無言になった二人の間を通り抜けてゆく。固まった空間の中、例外である龍鳳だけが一人、満足げにうんうんと頷いている。

「良いノリとツツコミ、腕を上げたね、ワタシはウレシイヨ？」

「俺は嬉しくないし…腕を上げたいとも思っちゃいねえ、それで何か用ですかね、生徒会長様？」

グツと親指を立ててくる彼女が文武両道、しかも今期生徒会長をやっている学校一の才女だと言って信じる人間が、はたしているのだろうか？

名前からも分かる通り在日中国人の龍鳳は、系統としては夜鳥に似たタイプの人間のだが、常に学年トップの学力と各部活の部長クラスからの勧誘をことごとく退け、しかも美少女と言うフィクションにしかないような完璧ぶりだ。

拳句の果てはどんな因果か、夜鳥を生徒会副会長に抜擢して顎でこき使っていると来ればどちらがより上位種かは言うまでもない。

当の夜鳥も、龍鳳に使われるのは満更嫌では無いらしいので何も問題は無いはずだ。

出来ればそこに、八雲を巻き込まないでくれると助かるのだが…
そももいかなない理由があったりする。

「生徒会長サマなんて他人行儀ナ、義弟ヨ。^{オトウト}何時ものように義姉と^{アネ}呼ぶがいいネ」

「いや、本当に今さらだけど血は繋がってないし親戚関係でもないし…普通に一つ違いの幼馴染でいいんじゃないかね？」

「ハハツ、血の繋がりが？親戚関係？私達の絆はそんな物を問題とシナイネ、八雲はアノ義姉弟の誓いを忘れてシマタノ力？」

「あんな若さゆえの過ちを忘れられると思ってるのか？」

「ゼンゼンネ!!!」

力強くこぶしを握って断言する龍鳳に、八雲は精神的な頭痛を押さえて、ため息をつく。

忘れもしないし忘れられもしない十年前、近所に龍鳳の一家が引っ越してきたことから始まる。

当時6歳と7歳の二人は普通に、そして自然に仲良くなった…要するに二人は八雲の言うとおり幼馴染であるがしかし、問題は仲良くなつてしばらくした時に起こった。

この女…龍鳳は「八雲、ワタシと桃園の誓いをシテ義兄弟の誓いを結ぶネ!!!」と言い出したのだ。

中国人らしいと言うべきか、子供だつて知っていてもおかしくはない有名な歴史エピソードの一つで、義姉弟の契りを結ぶと言うならこの上ないのは確かだ…一人っ子だつたため、友達と姉が同時に出来ると思つて無邪気に喜んだ八雲は色々な意味で若かつたのだらうとは思つ。

後々後悔しまくる事も知らず…。

幾らなんでも近所に桃の木なんてものは無かつたので、時期的に満開だつた桜で代用した桜園の誓いだつたが、ほほえましかつたのはここまで…龍鳳は桃と桜の違い以外は“完璧に再現しやがつた”

のだ。

ジュースと違って飲んだそれに、奇妙な苦みを感じてから後の記憶が八雲にはない。

気がつけば、何が起こったのか荒れ果てまくっている公園に二人、地面に大の字になって寝ていた。

満天の夜空が綺麗だったのは覚えている…何で通報されなかったのかは今を持っても謎だ。

既に日が沈んで夜になっていると気が付き、慌てて家に帰れば両親が搜索願まで出していた…二人揃ってこっぴどく叱られたのを忘れろと言う方に無理がある。

このエピソードだけで、龍鳳と言う人物が子供の頃からどれだけ非凡だったかを説明するには十分だろう。

しかも、歳を追うごとに落ち着くかと思いきや、事あるごとに厄介事に八雲を巻き込み続けるトラウマメーカーへと進化しやがる有様…やはり最初に姉というポジションを許してしまったのが間違이었다としか思えない。

せめて劉備のように年下でも兄のポジションを確保できていれば、まだ主導権の握りようもあっただろうに…ちなみに、ご近所さんの幼馴染で、一つ年上才女と…これだけ要素が揃えば、恋人フラグの一つも立ちそうなものであるが、それを本人達に言えば、「この世が滅ぶ直前に二人つきりになったとしてもありえない」と躊躇なく揃って素で答える二人には、歳相応の恋愛要素は皆無…そんな甘々な代物より遙かな厄介な姉弟関係ではある。

「…それで、何か用か“義姉ちゃん”？」

「フム、観念したようで大変ヨロシイ」

これ以上は何を言っても反論しても無駄だし、必要以上に意地を張る場面じゃないと判断した八雲は白旗を上げた。

三つ子の魂百までとはよく言ったもので、子供の時に定まったヒエラルキーは容易く覆らない物だ。

八雲の降参に満足した龍鳳は手に持っていたバスケットを備え付

けられたサイドテーブルに置くと、刑事の座っていた椅子に座る。

「サツサと用件を済ませてとっととゴーホームしやがり下さいませ
義姉上」

「よろしい。そんなに元気なら問題ないわね、ではまず現状の確認
と行きましようか？うん、数日眠っていたんだから、何にも知らな
いでしょ？」

あからさまな皮肉をどこ吹く風と流し、八雲の目の前で龍鳳は自
分の持ってきたバスケットから果物ナイフとメロンを取り出すと、
器用に椅子に座ったまま切り分け始めた。

何が楽しいのか、やたら上機嫌でわくわくと心臓の音が聞こえて
きそつな龍鳳と対照的に、八雲はジト目になる。

「…なあ義姉ちゃん、ひとつ聞きたい事があるんだけど？」

「ん？何かしら、義弟よ？」

「普通にネイティブな日本語を喋れるのに、何故に何時もエセ中国
人な発音をしてるわけ？」

「わちゃ！！」

聞いた瞬間に、龍鳳の顔がムンクになった。

ポロリと落ちた果物ナイフが床で跳ねたのが物騒で仕方がない。

「し、しまったネ！！油断したヨ。でももう油断しないネ！！これ
が龍鳳さんの素！！ベーシックスタイルで四露死しやく苦ヨ！！」

「いや…本気でなんで？」

「勿論、キヤラ立てのためヨ！」

「…マジで？」

「ツンデレっ娘にメガネっ娘、妹娘とそろそろチャイナっ娘の需要
が出てくると思うヨ！！」

「いや、そんな事言われても俺は知らん」

こんな女だが、生徒達にはやたらと人気はある…何でこんな女に
人望が集まるのだろうか？

同時に、浮いた話もまた立たないのだが、それに関しては見たま
んまだろう。

何にしてもそうだが、遠巻きに見ている分には被害がないし、見ていて楽しいが、その渦中に入っていくとなると高く広い壁があるのだ。

「そんな事はどうでも良いネ。問題は八雲の事ヨ？アナター躍時の人になつているネ。学校内限定ではあるケド」

「あー、まあそうだろね」

警察まで病室に話を聞きに来るほどだ。

現場である学校で騒ぎにならない方がおかしい。

このままだと復帰した時にいろいろ面倒そうだと考えると少し鬱になる。

「ヤクザの鉄砲玉に襲われた説、男同士の許されざる関係の果てに刺されたエトセトラエトセトラ…大穴で痴情のモツレとかどれが本当ネ？」

「碌な噂がねえな！？みんな嘘だよ！！誰だよそんなとんでもないうわさを流してやがるのは！？」

特にお約束の男女関係のもつれが大穴で出てくるあたりが酷い。

「私は夜鳥から聞いたネ」

「噂の火元はあの焼き鳥野郎か！！」

「オッズ表までツクテタヨ」

とりあえず、学校に行つて一番最初にやる事は決まった。

「まあ、八雲に限って痴情のモツレ“だけ”はあり得ないつてオモテタヨ」

「一番最初に一番現実的な可能性を削除された！！それはそれで納得できねえものを感じるんだけどなあー！！」

八雲の怒声をBGMに聞きながら、龍鳳は予備の果物ナイフを取り出してメロンを切り分けていた。

一口サイズにしたメロンを、持参した皿に置き、これまたバスケットの中に持参して来たフォークを取り出すと…。

「………おい、ちよつと待った」

「何ネ？」

「何で自分でメロン食ってんだ？」

龍鳳は用意したメロンを八雲に勧める事無く、自分で食べたのだ。

しかもパクパクと次から次に口に放り込むと言う、全然容赦がねえ食い方をしているやがる。

「…当然、美味しいからネ、何かヘンカ？」

「おかしいだろ、見舞品じゃなかったのかよ!？」

「何を勘違いしてたの力愚弟？これは私のオヤツですよ？」

「愚弟言つな愚姉、あんた最悪だ!! 思いつきり嫌がらせじゃねえか？」

味気ない病院食で日々過ごしている育ちざかりの17歳をなんだと思っでいやがるのか。

ついでに、結構な高そうなメロンなのだから、もっと味わって食べと言いたい…そんな風に少しうらやましく見てしまったのはご愛嬌だろう。

姉とかぬかしてるくせに、なんで弟にも食べせると言う発想が出てこないんだこの自称チャイナっ娘は?…っと、そんな風に怒りを溜めている八雲の目の前で、龍鳳はメロンを完食した。

八雲に見せ付けるように、一玉丸々胃に収めた龍鳳は猫のような目を至福に歪ませて満足げに頷いている。

「…地獄に落ちればいいのに…」

「さて、八雲をからかうのはこれくらいにして、そろそろ尋問を始めようかヨ? 弟に何があったのか、姉としては本当の事をシリタイネ」

ここまでの全てが八雲をからかうためだけの脱線だったらしい。どうでもいい事にどれだけ真剣に取り組んでんだこの女はと思うが…それを言っても無駄なのは10年の付き合いで嫌と言うほど知っている。

最後は結局、八雲が折れて溜息をつく事になるのだ。

「それで、何があった力ネ？」

興味ありますと言う顔で身を乗り出して来る龍鳳に、八雲はさらに深い溜息をつきつつ、刑事にも話さなかった事を語り始めた。

何だかんだ言っ、八雲は龍鳳に苦手意識を持つてはいても、嫌っているわけでは無いし、自分の中だけに置いておくには体験した内容が強烈に過ぎる。

「フム〜つまり、夢の中で聞いたのと同じ声を聞いて振り向けば、イキナリ異世界にコンニチワシタト？」

「まあ、その通り」

「しかも成り行きでお姫様を助けた拳句に殺されかけ、何がナンダかわからないけど変身して、気がついたら学校の廊下でぶっ倒れて死に掛けていたト？」

「大まかに端折ったらそんな感じ」

龍鳳は八雲の話を聞き、反芻し、唸っている。

にわか信じられないのだから、いきなり精神科への入院を勧められないだけ、この反応はまだ良い方だろう…八雲の語った話は、あまりにもファンタジー過ぎるのだ。

だからこそ出会ったばかりの刑事達には本当の話をする気になれなかった。

龍鳳が頭から冗談として受け取らないのは、良くも悪くも長い付き合いがあるため、少なくとも八雲が本気で話している事くらいは察してくれるからだと思う。

「声の主がそのまま、向こうの世界に連れて行った張本人で、そのお姫様を助けさせる為だったんじゃないかと八雲は考えている…ここまで間違いはない力ネ？」

「確証はないけどほかに考えられる理由が思いつかねえし」

あの声と気配を感じて振り向いたところからすべてが始まった。

これで関係がなかったとしたら、そっちの方が間違いだろう。
「……義姉として義弟の話を疑う気はないけど、にわかには信じがたい話ネ」

「いや、疑ってくれてもかまわない。っていうかむしろ少しくらい

疑ってくれないと義姉さんの頭の心配をしなきゃならん」

「話に矛盾があるのではないかヨ？」

「…スルーですか？」

龍鳳は八雲と話しているくせに興味のない話を聞いていない節がある。

会話しているのに放置プレイとはこれいかに？

「確か、傷は派手に血は流れたケド命に関わるほどの傷じゃナカタって聞いたヨ？死にかけたってドイウ事ネ？」

「俺も、絶対致命傷だと思っていただけ、こつ…背中からグサツとやって、背骨がボキって言つて、腹から刃物が飛び出してきて、あとは肩が千切れかけるほど抉られたはず…なんだけどな…」

自分でも良く分からないと言ながら、八雲は服を捲くって傷口を見せる。

八雲の言う場所には5つの切り傷…ただしそれは、何ヶ月か経てば傷痕も残らないだろう軽傷だ。

抉られたと言う肩も見せたが、こっちは派手に地面にこすれたような擦り傷が、瘡蓋になっている。

対する龍鳳はいきなり目の前で上半身裸になられたというのに慌てず騒がず観察者の目で傷を検分している…義姉弟とはいえ、この女に羞恥心はないのか？

真っ赤になつて顔をそらすような初心さなんて期待しちやいないが、それでもまじまじと見られると八雲の方が気恥ずかしい。

「どう見ても命に関わる傷ではないヨ？肩はともかく胸の傷は八雲の言うトリーなら普通に死ねるんじゃないかと思うケドネ？」

「誰よりも自分がなんで生きているのかおしえてほしい」
「ばつちりしつかり臨死体験を経験してきたのは夢じゃない。」

これが異世界の不思議パワーだというのなら、この世界の医療に大革新を起こせるだろう。

発表できれば一生金に困らないだろうとか、そういうレベルの奇跡っぽい何か…とはいえ、実際の現場を見た人間か、被験者の八雲

自身以外はそれを見たわけでもないので異世界の証拠にはならない。ならば…別の証拠が必要だと、そんな事を考えていたら、ふとある物の存在を思い出した。

「証拠になるかどうかわからないけど」

断つてから、八雲はサイドテーブルの引き出しから取り出した物を、指ではじいて龍鳳に軽く飛ばす。

いきなり物を投げられた龍鳳だが、軽く片手で飛んできた物をキヤッチした。

流石は拳法の国出身…関係あるかどうかは知らないけど…龍鳳の手中にあつたのは蒼い指輪、八雲がラインに王城にいる妹に届けなくて渡された物だ。

「これは…シーリングワックス？」

「シーリングワックス？洗剤の親戚？」

「説明が面倒だけど要は判子ネ」

「全然説明簡単じゃねえ？」

龍鳳はしばらく投げ渡された指輪型のシーリングワックスをじっくりみていたが…。

「うん、信じるヨ。大変ダタネ、八雲？」

唐突且つ、あっさり八雲の言葉を信じた。

「マジ？信じた根拠は？」

「八雲は気づかなカタネ？この指輪…ちょっと変ヨ？」

龍鳳はサイドテーブルに乗っていた花の生けてある花瓶と備え付けのコップを手に取る。

刑事さん達が持ってきてくれた見舞いの花を、龍鳳は無造作には花瓶から引っこ抜くと、お前は用無しとばかりにぽいっとゴミ箱に放り込む。

自分は見舞いの品すら持ってこなかったくせにと怨みがましく見えていたら、龍鳳は花瓶の水をそのままコップに注いだ。

「飲むの？」

「何が悲しくて花瓶の水を飲まなきゃならないネ？冗談きついネ」

あははと笑いながら、龍鳳は無造作に指輪をコップに入れた。

一連の行動の意図も意味も分からず、八雲の頭に？マークが浮かんだ。

「何：が：？」

八雲の言葉が途中で切れ、その瞳が丸く見開かれる。

ガラス製のコップの底に沈んだ指輪が、徐々に淡く蒼い光りを放ちだしたのだ。

「水に入れると光る石なんて初めて見たネ？こんな知らないヨ」

「すつご！俺初めて義姉と言う生き物を尊敬したかもしんない」

「初めてつて…儒教の国なら殴られても文句言えないヨ？もつと敬意を払って欲しいネ」

龍鳳が拗ねた横目で見てくるが、テンションの上がっている八雲は気にしないし気にならない。

「どうして判ったか教えてくれたら、これからずっと義姉ちゃんのことを先輩って呼んでもいい」

「それは当然ネ、私のほうが年上ヨ、年長者は無条件で敬う物ネ」
機嫌が良いのは間違いないらしい。

フンと胸を張った龍鳳はニヤリと八重歯を煌かせて説明を始めた。

「メロンの果汁が手についてたヨ、それで触った所が徐々に光りだしていたのを見たネ」

「リアルな意味できったねえな！尊敬した全俺がブーイングだよ！
！預かりモンに何してくれてんだ！？このバカ姉！！」

「自分だつて投げ渡したじゃないネ？」
どっちもどっちだ。

コップに指を入れて指輪を取り出した八雲は、綺麗に拭いて再び引き出しにしまう。

ついでにポケットティッシュを龍鳳に全力で放り投げたら、軽く人差し指と中指ではさむようにキャッチされた。

顔面にたたきつけてやるつもりだったのに…不覚にもちよつと力

ツケーとか思ってしまったではないか。

「さて、そろそろ本題に戻ルヨ？」

普通に指についた果汁をティッシュで拭い、なんでもないので椅子に腰掛けて話を進めようとする龍鳳に殺意が沸くが、話を進めるのは八雲としても望む所なので自分を抑える。

次に何かあれば切れるかもしれないが…。

「…っ!？」

ここは我慢だと…自分に言い聞かせていたらいきなりゾクリと来た。

はっとして龍鳳を見ると、龍鳳が猫のような瞳で意味ありげに八雲を見ている。

「アヴァロン、イギリスの伝説に出てくる妖精郷ね、理想郷とも言われている場所よ」

「よ、妖精郷に…理想郷？」

龍鳳の口調が標準語になっている…今度のこれは油断じゃない。口調だけじゃなく、纏っている気配すらも一変して…空気すらも妙な熱をはらみ始めた気がする。

明らかに“八雲の苦手な龍鳳の一面”が出て来ていた。

「それにしても、初めてあった女の子を連れて逃げようとするなんて…」

話がいきなりあらぬ方向に飛んだが、今はそんな事にかまっていない場合では無く余裕もなかった。

龍鳳がベッドに載せた手に体重がかかり、ギシリと軋む音と共に八雲に向かって身を乗り出して来たからだ。

「死ぬとは思わなかった…わけでもないわよね？貴方はそんなに頭が悪いわけじゃない。ひょっとして、見つけちゃったの？」

「違う、そんなんじゃない」

とっさに否定の言葉が出た。

「あれは…勝手に人に色々押し付けられそうになったのが気に入らなかつただけで…」

「…そう、変わらないのね…」

じりつと…音がしそうな勢いで更に互いの距離が詰まる。

「な、何が…」

「貴方のそう言う所よ。何時も飄々としているくせに、気に入らないと思つたことや譲れないと思つた事に対しては、反動みたいにして頑固に執着して、絶対譲らないし妥協しない所よ」

「ね、義姉さん…」

狩りをする雌の肉食獣のように、ゆっくり彼我の距離を詰める今の龍鳳はとんでもなく艶めかしい。

龍鳳が八雲にのしかかるような体勢だが、気を抜けば思わず逆に押し倒しそうになってしまふほど…彼女を女として見ていないはずの八雲にさえ、濃密な“女”を感じさせる色気があった。

幾らなんでもそれをやってしまえば色々アウトなので必死で抑えるが…いや、むしろ長い付き合いの八雲だからこそ、ここまで自制がきいていると言うべきか？

すでに目の前まで迫っている龍鳳は蟲惑的で怪しく、魅力的で…とてもじゃないが一つしか歳の変わらない少女の持つ妖艶さだった。

「そんな貴方が誰かに本気で拘る時、どうなるかとっても楽しみよ」
柔らかい果実のような唇から洩れる声にさえ砂糖のような甘さがある気がする。

クラスメイトの女子達とは根本から違う生き物にしか思えない。

彼の国の歴史には楊貴妃を初めとした傾国の美女が語られているが、目の前にいるのもその類ではないのか？

生まれる時代が違えば三大美女の四人目に龍鳳の名前があったかもしれない…とまでは言い過ぎだが、それに近い雰囲気はあると思う。

「それに、本当に…声の主の目的はそのお姫様を助ける事だったのかしら？」

「え？」

思ってもいなかった問いかけに、八雲が呆ける。

「そ、それ以外に何があるって言うんだよ？」

「さあ…でもひよつとしたら…」

龍鳳がじつと八雲を見る…底の見えない深い瞳に全てを見抜かれるような気がして、酷く居心地が悪い。

戸惑う八雲を見る龍鳳は笑う…その笑みもまた、男を蕩けさせる類の物だ。

一番やばいと思うのは、危険だと理解は出来るのに…理解していながらそれでもクラクラしてくる女の魔性に理性が飛びそうになる事だと思う。

「何でそこまで…当事者の俺よりも義姉さんのほうが熱心なんだ？」

「それは多分、私の病気のせいね」

残った理性と常識で必死に反論して見れば、帰ってきた答えに甘い何かが吹っ飛び、思いつきり八雲がズザッと退いた。

退いてそのままベッドから落下…コンクリの床に落下し、脳天を突き抜ける鈍い音と激痛に火花が飛び、力手割れるかと思った痛み
に悲鳴が呻き声になる…ここまで0.23秒。

「~~~~っ~~~~っ!!」

声でない痛みに床を転げ周る八雲をベッドの上から見下ろして、
フムとうなつた龍鳳は…。

「…オオ、八雲ヨ。シンデシマウトハナサケナイ」

「死んでない!!」

「ただの屍は返事したらダメネ」

「屍じゃないって言うてるだろ!!」

叫びつつばつと飛び上がって立ち上がった八雲は、龍鳳に向かつてファイティングポーズをとる。

「その反応は女の子としてちょっと傷つくヨ」

気がつけば…ノーマルバージョンの龍鳳に戻っていた。

しかし、とんでもサプライズ直後では事情を聞くまで油断できない。

「姉上…つかぬ事をお聞きますが…それって伝染うつるんですしょくか？」

「使い捨てカメラがドシタネ？」

丁寧語になつてしまつた質問を質問で返した上に、クスクスと笑う龍鳳に八雲もからかわれた事に気づく。

あれは確信犯の笑みだ。

「安心するヨロシ、伝染するような病気じゃないネ」

「じゃあ、どんな？」

「だって、八雲はワクワクしないカネ!？」

「…は？」

具体的な答えに至るまでもなく、のっけから予想の斜め上を呼んで行く答えに、八雲の思考が止まつた。

やたらとキラキラした純粋な目の中に炎が燃えている…ように見える。

「ワタシ、小さい時から仙人の話や妖怪変化の話とかトテも大好きダタネ!! 色々知つて本当はそんなのはいないって知つた時はひっじょくに残念ダタヨ!!」

今の龍鳳は輝いている…様に見えるが、なんだこれ？

「だって異世界あるよ!! 八雲はドキドキしないカ? 誰も知らないことを知ることが出来るかもしれないヨ。見たことないものが見れるかもしれないネ」

「…なるほど」

明らかに興奮している龍鳳を見て、八雲の中に何かがすとんと落ちてきた。

確かにこれは病気だ。

病名は好奇心、あるいは知識欲…思えば、彼女は昔からいろんな物に興味を示していた。

どうやらアヴァロンという別世界の存在は、龍鳳の琴線をかき鳴らしてしまつたらしい。

「ともかく、今度向こうの世界に行く時はワタシも連れて行って欲しいネ!」

「いや、また行かつて決まつたわけじゃ…」

「何言ってるネ！？これで終わるわけナイヨ、八雲は絶対また行く事になるネ。だから連れてくヨロシ！？」

「根拠は何だ根拠はー！！！」

「ワタシ連れてくとかーなりお買い得ヨ！！損はさせないネ！！」
「話を聞けや！！良い笑顔で平穩を望む俺の希望を打ち砕きつつ自分を売り込んでいんじゃないやねえ！！ってあれ？」

いきなり力が入らなくなった八雲が、ポテンと前のめりにベッドに倒れた。

「昏睡状態になるほど血を流して、しかも未だに怪我人なのにそんなに興奮したら立ちくらみもするヨ？」

「だれの…せいだと…」

文句もまともに言えやしない。

不自由になつて初めて健康の大事さに気がつくと言うのは、確かに真理だとは思うが、いくらなんでもこれはないだろう…：…：龍鳳が身動きできない自分をヤレヤレな顔をして見ているのが憎らしい…：
また血圧が上がらそうだ。

しかも最悪な事に、怒鳴り倒したせいで傷口が開いたかもしれない…：これで死んだらダイイングメッセージで龍鳳を指名してやると誓いながら、八雲は人生初のナースコールを押した。

第二節 傾国的美少女来襲（後書き）

遠野八雲

一応は主人公ポジション……何かには現在進行形で巻き込まれ中。基本スタンスは一步引いて客観的に物を見る冷めた性格で拘りも少ないが、ここぞと言う時や自分ルール、気に入らないと思った事には執着する極端な二面性を持つ。学校の勉強はそこそこだが、愚かと言うわけではない。性格の構築、物事の見方に義姉である龍鳳の影響を多分に受けている。

名前の由来は遠野物語と怪談の作者の小泉八雲から。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9398z/>

妖精郷幻想奇譚

2012年1月14日20時22分発行